

Graduate School of Energy Science
Kyoto University

2025/Energy

<https://www.energy.kyoto-u.ac.jp>

京都大学大学院
エネルギー科学研究科

2025年度

Graduate School of Energy Science
Kyoto University

2025/Energy

<https://www.energy.kyoto-u.ac.jp>

京都大学大学院
エネルギー科学研究科
2025年度

Contents

■ ようこそエネルギー科学研究科へ	2
■ エネルギー科学研究科	4
■ 専攻及び附属センター紹介	
・エネルギー社会・環境科学専攻	6
・エネルギー基礎科学専攻	12
・エネルギー変換科学専攻	20
・エネルギー応用科学専攻	26
・国際先端エネルギー科学研究教育センター	32
■ 関連分野表	34
■ 入学から就職まで	36
■ 国際交流活動	42
■ 国際エネルギー科学コース	44

ようこそエネルギー科学研究科へ

エネルギー科学研究科長・馬淵 守



エネルギーの確保および環境の保全は、人類が将来にわたって安全・安心に生活していく上で最も重要な課題です。

エネルギー科学研究科は、このようなエネルギー・環境に関連する様々な課題を克服するために、工学、理学、農学、経済学、法学などの多岐にわたる学問領域を結集して、「理工系に人文社会系の視点を取り込みつつ、学際領域としてエネルギー科学の学理の確立をはかり、地球社会の調和

ある共存に寄与する国際的視野と高度な専門能力をもつ人材を育成する」という理念を掲げ、平成8年に創設されました。以来約30年の間、エネルギー・環境問題は様々な様相を示しています。当初は化石燃料の枯渇や地球温暖化問題がその中心でしたが、平成23年の東北地方太平洋沖地震により引き起こされた大規模地震災害とこれに伴う福島第一原子力発電所の事故は、多くの人々にエネルギーシステムの脆弱さを実感させました。そして、今、災害に強く環境にやさしい新しいエネルギーシステムの構築が求められています。エネルギー科学研究科では、このような社会に適應するエネルギーシステムの構築に向けて、それを支える基盤技術開発研究から、その導入を図るための経済や政策、教育といった社会的側面からの研究に至るまで、国際的な視野に立った最先端の研究を行いつつ、将来この分野で中心的な役割を演ずる人材の育成に努めています。

本研究科は、エネルギー社会・環境科学、エネルギー基礎科学、エネルギー変換科学、エネルギー応用科学の4つの専攻から成り、エネルギー理工学研究所、複合原子力科学研究所、人間・環境学研究所の協力のもとに、基幹講座22分野、協力講座17分野で構成されています。各専攻にはそれぞれ客員講座が設けられ、国内外から第一線の研究者・技術者を招へいして先端分野の教育研究を実施しています。さらに、国際化推進を支援する組織として、国際先端エネルギー科学研究教育センターを設置しています。また、本研究科の特徴的な教育カリキュラムとして、各専攻に設けられた通論において全体を通じた基礎的体系が概説されるとともに、豊富な科目群が提供され、各個人の選択によりエネルギー科学を総合的かつ体系的に習得し、多彩な知識の啓発と専門能力の涵養が図られています。さらに、英語のみで修士・博士の学位が取得できる国際エネルギー科学コースや、海外の大学と提携し二つの学位を同時に取得できるダブル・ディグリー制度を設けるなど、研究のみならず教育においても国際化を推進しています。

本冊子では、これらエネルギー科学研究科を構成する各分野・センターにおける、教育と研究の内容を紹介しています。また、学生募集、教育研究カリキュラム、修了生の進路、国際交流などについて解説しています。是非、この冊子を通じて本研究科の理念に共感していただき、興味を抱いた分野に志望・入学して、エネルギー・環境問題の解決に意欲的にチャレンジし、将来さまざまな分野で活躍されることを期待しています。また、共同研究などを通じ社会の発展に皆さんと一緒に貢献したいと思っています。

入学を希望される方に

本年度は、修士課程 130 名、博士後期課程 35 名を募集致します。

1. 入学試験について

入学試験は、

- (1) 優秀な資質をもった人材を、国内、国外を問わず広く門戸を開いて迎え入れる
- (2) 研究レベルの向上に繋がる優秀な人材を学生として迎え入れる
- (3) 社会人としてすでに多種多様な知識、経験を有する人材を学生として迎え、教育・研究に深さと幅を持たせる

等の基本的な考え方に従い実施しています。

また、出題にあたっては、受験生が今まで受けてきた教育基盤の学問領域が多岐にわたっていることを配慮しています。すなわち、受験生に同一の試験問題を課してその成績により一律に合否を判定するのではなく、基礎的な学力を評価しつつ、さらに複数の問題の中から出身学部・学科に応じて受験生が得意とする問題をいくつか選択して解答できるように工夫を行っています。

2. カリキュラムおよび学習支援について

広い視点・国際的視点と多角的な知見をもとにエネルギー・環境問題を解決することができる人材を育成することは、エネルギー科学研究科の重要な使命です。そのためには、大学院の課程で自然科学と社会科学の双方にわたる幅広い学識を学び、それらを総合的に活用する能力を養うことが必要です。そこでエネルギー科学研究科の修士課程では、自然科学から社会科学にわたる多彩な授業科目や、他専攻セミナー、学外研究プロジェクトなどを特徴とする従来にはない新しいカリキュラムを実施しています。また、多くの海外からの留学生との交流も含め、他分野研究者との相互交流を体験し、「エネルギーシステム」全体を俯瞰する能力を獲得することにも努めています。さらに新型コロナウイルス感染防止にも努め、対面講義においては十分配慮するとともに、講義・行事のオンライン／ハイブリッド化を進めています。博士後期課程学生を経済的に支援する研究科独自の制度も設けています。人類の生存にかかわる様々なエネルギー・環境問題に対して、幅広い国際性と深い専門性をもって社会の要請に応えとともに、自然環境

と人間社会との調和を図りながら、創造性と活力にあふれる 21 世紀社会をリードする若手研究者の育成を行います。

3. 修了後の進路について

修士課程を修了した学生は「京都大学修士（エネルギー科学）」の学位を授与されて社会に巣立っていきます。博士後期課程を修了し、学位論文の審査に合格すると、「京都大学博士（エネルギー科学）」の学位が授与されます。修士課程修了者は、国家公務員、地方公務員、公社、電力、ガス、電気、機械、自動車、重工、鉄鋼、非鉄、化学、情報、窯業、繊維、等々、実社会の多岐に渡る分野に進出しています。博士後期課程学生は、大学、研究機関、試験機関、企業の技術開発部門、シンクタンクなどで活躍しています。エネルギー科学研究科の修了生、元教職員、現教職員の同窓会「京エネ会」が平成 15 年に発足し、世代間の人的交流を図っています。社会で活躍する女性修了生と女子学生の交流の機会を設けるなど、多様なキャリア形成の支援も行っています。

エネルギー科学研究科は、創設理念に基づいて教育・研究活動を展開し、国内外から注目される数々の優れた成果を上げ、大きく発展してきました。平成 22 年度より国際エネルギー科学コースを設けるなど、海外からの留学生も積極的に受け入れています。エネルギー科学カリキュラムの普及ということに関しては、平成 30 年度からユネスコ・チェア事業に参画する他に、平成 25 年 3 月より開始の JICA の支援プログラムである AUN/SEED-Net においてエネルギー分野の拠点校になり ASEAN 地域の活性化に貢献するなど、国際化を積極的に進めています。

海外の協定校とのダブルディグリー制度や共同ラボの設置、国際先端エネルギー科学研究教育センターの設置等、本研究科は更なる充実を目指して力強く進み続けています。エネルギー・環境問題の解決は、人類の持続的な発展のための最も重要な課題です。この重要課題に果敢に挑戦し、未来を拓こうとする人々に、この活力あふれるエネルギー科学研究科に集まっただき、教職員とともに手をたずさえて叢智を結集して優れた研究成果を上げ、その成果を世界に還元し、大いなる人類の未来構築の道とともに進まれることを心より期待しています。

京都大学大学院 エネルギー科学研究科 Graduate Sch

Energy

エネルギー
社会・環境科学専攻

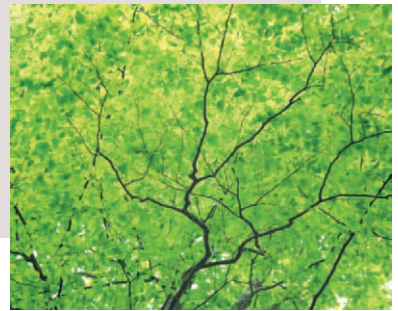
エネルギー問題解決のための
広範な知見と
高度な判断能力を養成

Energy

エネルギー
基礎科学専攻

化学と物理学を基礎とした
エネルギー科学の
追求と実践

理工系に人文社会系の視点を取り込みつつ
「エネルギー問題」克服のための新学際領域を確立



ool of Energy Science Kyoto University

Energy

エネルギー

変換科学専攻

環境調和性を有する
エネルギー変換の原理と応用に
係わる高度な能力を養成

Energy

エネルギー

応用科学専攻

エネルギーに関する熱科学と
有効利用のためのプロセッシングに
関する高度な能力を養成



Graduate School of Energy Science Kyoto University

Department of Socio-Environmental Energy Science

エネルギー社会・環境科学専攻

環境と調和するエネルギー、社会システムを求めて

人間社会や地球環境と調和しながら21世紀の人類文明の
持続的発展を可能にするため、エネルギー社会・環境科学専攻においては
エネルギー問題を社会的、政治的、経済的、生態・環境的諸側面から
総合的に分析・評価し、理想的なエネルギーシステムの
構築を目指します。

講座説明

講座名	分野名	内容説明
社会エネルギー科学	エネルギー社会工学 エネルギー経済 エネルギーエコシステム学	エネルギー生産、貯蔵、分配、利用、廃棄についての工学的・生態学的側面と経済性、安定性、環境調和性などの側面とを総合的に評価し、これを基に複雑な政治的、経済的特徴を持つ社会システムのあり方について教育・研究します。
エネルギー社会環境学	エネルギー情報学 エネルギー環境学	社会・環境との調和性の観点からエネルギーの生産、貯蔵、輸送、変換、利用、廃棄に至るエネルギーシステムの設計・評価法ならびにシステム安全のあり方について教育・研究します。
エネルギー社会論 (協力講座)	エネルギー政策学 エネルギー社会教育	原子力エネルギーを中心としたエネルギー安全保障の国際的・技術的諸問題から見たエネルギー政策・エネルギー導入シナリオの諸課題、エネルギー問題の社会教育に関する諸問題、それらの問題を含むエネルギー環境問題についての社会的視点からの合意形成論について教育・研究します。
国際エネルギー論	(客員講座)	人口の爆発的な増加と一人当たりエネルギー消費量の増大は、エネルギー需要量を急増させるが、エネルギー資源は限界近くに達しています。エネルギー資源、環境、経済に係る国際的問題の予測と対処法について教育・研究します。

授業科目

修士課程	博士後期課程
● エネルギー社会・環境科学特別実験及び演習第 1, 2, 3, 4 ● エネルギー社会・環境科学通論 I ● Socio-Environmental Energy Science I ● エネルギー社会・環境科学通論 II ● Socio-Environmental Energy Science II ● エネルギー社会工学 ● エネルギー経済論 ● エネルギーエコシステム学 ● ヒューマンマシンシステム論 ● 大気環境科学 ● エネルギー社会教育論 ● エネルギー政策論 ● エネルギー社会学 ● 環境経済論 ● 国際エネルギー論 ● 学外研究プロジェクト	● 特別基礎科目 1 ● 特別基礎科目 2 ● 学際的エネルギー科学特別セミナー ● 産業倫理論 ● Energy Systems Analysis and Design ● Energy Policy ● Future Energy : Hydrogen Economy ● Energy Systems and Sustainable Development ● Energy, materials and resources ● Carbon Neutrality ● Environmental Economics ● Energy Future of the Asia-Pacific Region ● エネルギー社会工学特論 ● エネルギー経済特論 ● エネルギーエコシステム学特論 ● エネルギー情報学特論 ● エネルギー環境学特論 ● 国際エネルギー特論 ● 特別学外実習プロジェクト ● エネルギー産業政策論 I ● エネルギー産業政策論 II ● エネルギー科学技術政策論 I ● エネルギー科学技術政策論 II ● Advanced Seminar on Socio-Environmental Energy Science ● Zero-emission Social System

■ 社会エネルギー科学

自然科学と社会科学の融合

エネルギー社会工学

社会の発展とは何か、いかなる社会を作るかなどの問題意識を踏まえて、エネルギー・資源の生産、貯蔵、分配、廃棄についての工学的側面と社会的側面とを総合的に評価し、社会活動を支えるエネルギーの持続的な利用法を工学的に体系化していくための研究を行います。例えば、資源リサイクルや工業製品製造における環境・エネルギー評価、高機能な環境材料開発、エネルギー環境教育などについて基礎的な研究を行い、社会活動のあり方とエネルギー資源の最適利用法について研究しています。

(奥村 英之 准教授、小川 敬也 准教授、SHAH, Syed Shaheen 特定助教)

■ 社会エネルギー科学

経済発展・エネルギーの安定供給・ 環境保全の調和

エネルギー経済

将来社会を展望するとき、世界経済にとって最も深刻と予想されるのは、エネルギーを含む資源供給、地球環境保全、食糧供給の3つの制約です。これらの制約に適切に対処することが「持続可能な社会」を実現するための必要条件であり、そのためには社会経済システムの大胆な改編が不可欠となります。そしてその改編のためには、単に将来像を描くだけではなく、どのような意思決定環境を人間社会に提供すべきかという制度設計の問題が重要課題となります。エネルギー経済分野では、その社会システムのあり方の検討やその実現のための計画・制度設計を目的として、エネルギー経済・環境学およびシステム学について教育・研究を行います。

(Benjamin C. McLellan 教授、尾形 清一 准教授)

■ 社会エネルギー科学

地球にやさしいバイオマスの エネルギー化と有用物質への変換

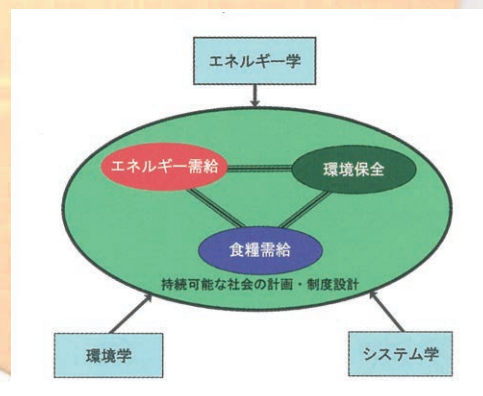
エネルギーエコシステム学

地球温暖化、化石資源の枯渇などのエネルギー・環境問題が喫緊の課題となっています。そこで、再生産可能でカーボンニュートラルなバイオマス資源の利用が不可欠になりつつあります。エネルギーエコシステム学分野では、分子機構に基づいた熱分解反応制御、超臨界流体、プラズマなどを用い、多種多様なバイオマス資源を、種々のバイオ燃料、有用ケミカルス・材料へと変換する技術について、基礎から応用に至る幅広い立場から教育・研究を進めています。また、これらの研究を通して、バイオマスを用いた持続可能な社会の構築を目指しています。

(河本 晴雄 教授、南 英治 准教授)



地球規模のエネルギー問題解決には国際的、技術的、社会的な視野に立って考える必要があります。



持続可能な社会の構築に向けて



バイオマス利用による循環型社会の構築を目指して

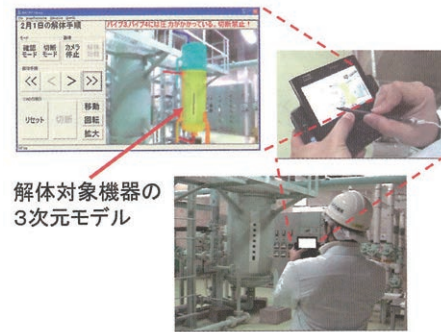
■ エネルギー社会環境学

ITによる新しい エネルギー社会システムの創出

エネルギー情報学

未来のエネルギー社会の構築には、人間・社会・環境の観点からふさわしいシステムのあり方を考究する必要があります。エネルギー情報学分野では、技術と人間・社会の共生と調和を目指す情報環境やヒューマンインタフェースの研究として、低環境負荷型の新しいライフスタイルの提案、エネルギーシステムの信頼性・効率性向上のためのシステム開発、エネルギー消費抑制と知的生産性向上を両立するオフィス環境の提案等の研究について最新の情報通信技術を活用して進めています。

(下田 宏 教授、石井 裕剛 准教授)



解体対象機器の
3次元モデル

拡張現実感技術を活用した
プラント解体支援システム

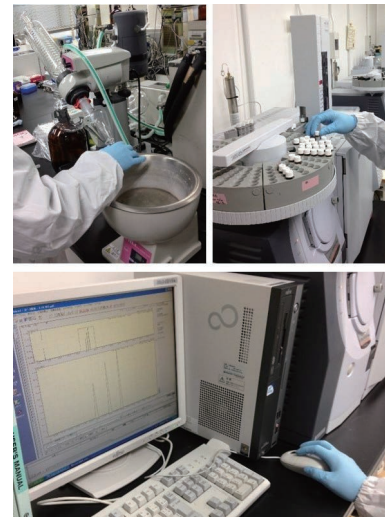
■ エネルギー社会環境学

大気環境科学に基づくエネルギー 環境問題の評価

エネルギー環境学

PM_{2.5}に代表される微小粒子状物質など大気汚染物質の多くは、エネルギーの利用をはじめとした人間活動に伴って発生します。環境中における大気汚染物質のふるまいを明らかにすることは、それらが我々の暮らしに及ぼす影響を考える上でも重要です。エネルギー環境学分野では、大気汚染物質が人の健康や社会、地球環境などに与える負荷を評価するために、フィールド観測や模擬大気環境下における実験等を行い大気汚染物質の環境中における動態を包括的に理解するとともに、それらの除去技術についても検討し、安全・安心な社会の実現に貢献することを目指しています。

(亀田 貴之 教授、AU, Ka Man 准教授、土屋 望 助教)



大気汚染物質の化学分析

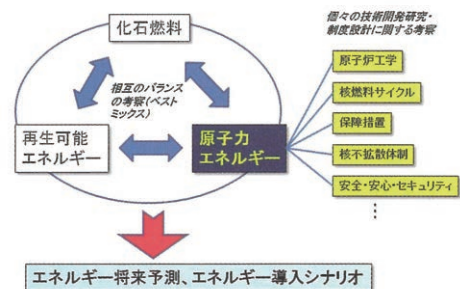
■ エネルギー社会論

原子力エネルギーの在り方に重点を置いた エネルギー政策・エネルギーシナリオの科学的評価

エネルギー政策学

エネルギー政策は、将来にわたるエネルギーの安定供給と効率的利用を実現し、エネルギーセキュリティの確保と環境への影響の低減を達成するための様々なアクションの枠組みを定めたものです。当研究分野では、自然科学・社会科学の両面で様々な特徴を持つ原子力エネルギーに重点を置き、エネルギー政策、エネルギー導入シナリオの中で原子力エネルギーが果たしうる役割について、資源、環境、経済性、技術開発の状況をふまえ、国際的視野に立って科学的に考察します。また、原子力エネルギーに関連する技術開発要素、制度設計に関する具体的テーマについても取り組みます。

(宇根崎 博信 教授、高橋 佳之 助教)



電力源のベストミックス（最適組み合わせ）に
関する科学的考察



■ エネルギー社会論

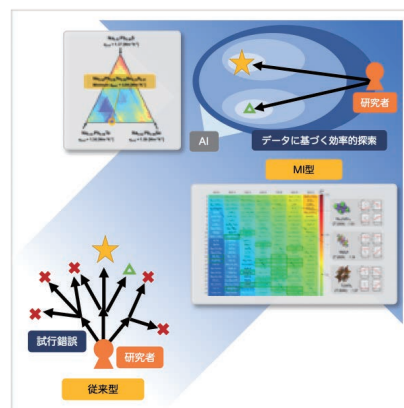
エネルギー材料科学とエネルギーシステム防災戦略

エネルギー社会教育

原子炉で用いられている核燃料や原子炉材料の特性を理解することは原子力安全の強化や原子力防災戦略の構築に直結する重要な課題です。固体物理や熱力学といった基礎学問を基軸として、様々な核燃料・原子炉材料を対象とした物質科学研究を推進します。また、情報科学と材料科学が融合した「マテリアルズ・インフォマティクス (MI)」に、世界に先駆けて取り組んでいます。

世界で起こるマグニチュード6以上の大きな地震のうち約20%が、日本の国土とその周辺で発生しています。このような厳しい自然環境の下で、安定的にエネルギーを供給するにはエネルギー関連施設や都市の耐震性向上及び被害後の回復力が重要となります。これら地震防災対策に必要な、地盤や施設の揺れの予測、建物の震動特性に関する研究も行います。

(黒崎 健 教授、上林 宏敏 准教授、孫 一帆 助教、外山 真理 助教)



従来型材料開発からMI型材料開発への変革
(黒崎研究室HP掲載の図をもとに作成)

■ 客員講座 国際エネルギー論

持続可能なグローバルシステムの究明

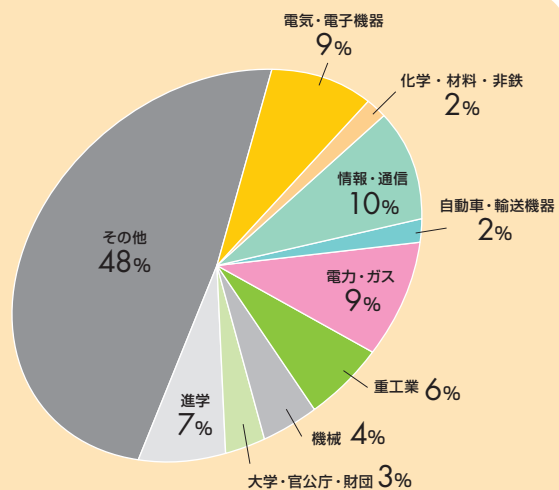
エネルギーの高度な、また多量の利用が先進国に集中している現状から、発展途上国などにおいてエネルギー利用が増大するに際し、惹起すべき諸問題の予測と対処法について教育・研究を行います。



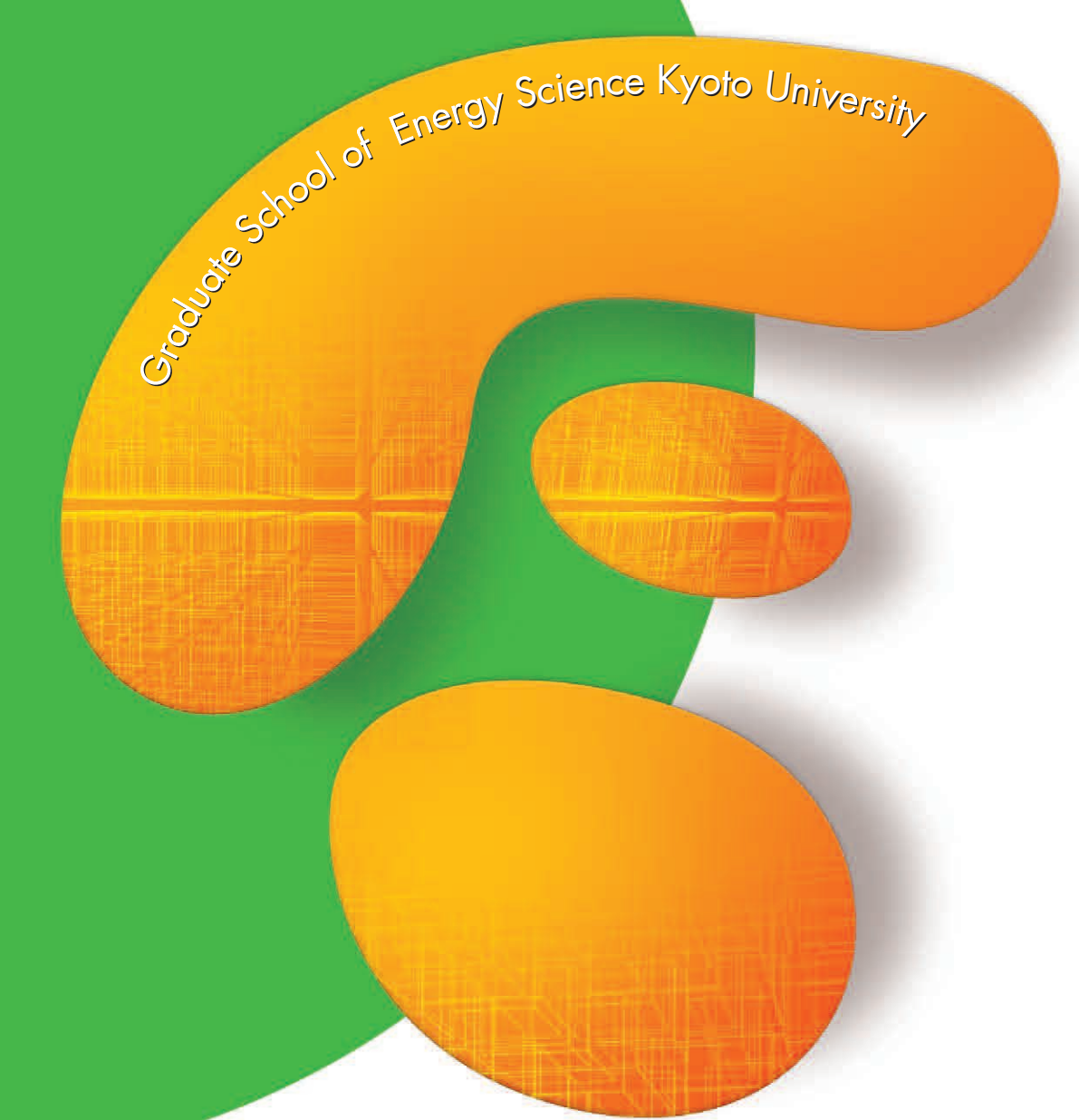
エネルギー社会・環境科学専攻 過去3年間の修士課程修了者就職先

＜主な就職先＞

アクセンチュア株式会社
株式会社日本政策投資銀行
三菱重工業株式会社
株式会社IHI
プロクター・アンド・ギャンブル・ジャパン株式会社



その他の内訳…その他製造業(3%)、サービス業(21%)、商社(3%)、金融・保険業(8%)、その他(未定など)(13%)



Graduate School of Energy Science Kyoto University

Department of Fundamental Energy Science

エネルギー基礎科学専攻

エネルギーを探究する新しい基礎科学

物理化学、材料化学、電気化学、固体化学、生物化学などの「化学」と、
量子力学、電磁気学、統計力学、物性物理学、プラズマ物理学、核物理学などの「物理学」を基盤にして、
エネルギー問題解決に貢献するための基礎科学についての
教育と研究を行います。

講座説明

講座名	分野名	内容説明
エネルギー反応学	エネルギー化学 量子エネルギープロセス 機能固体化学	量子、熱、化学、電気などの各種エネルギーの発生、制御、変換に関わる素過程、反応、プロセス、物質、および材料について、化学に重点を置いた教育・研究を行います。
エネルギー物理学	プラズマ・核融合基礎学 電磁エネルギー学 プラズマ物性物理学	エネルギー基礎科学における物理的諸過程の総合的理解を深めるために、力学、電磁気学、統計力学、物性物理学等を基盤として、非線形物理学、電磁エネルギーなどのエネルギー物理の教育・研究を行います。あわせて、核融合エネルギーの利用を目指して、その原理と手法を追求します。
基礎プラズマ科学 (協力講座)	高温プラズマ物性 エネルギー光物性	高温プラズマの運動論的・磁気流体的な学理を追求し、その平衡・安定性・輸送および加熱などの挙動を解明していくための教育・研究を行います。さらに、物性物理学の視点を通して、エネルギー生成・変換に関わる新しい原理と手法を追求します。
エネルギー物質科学 (協力講座)	界面エネルギープロセス エネルギーナノ工学 エネルギー生物機能化学 生体エネルギー科学	物質とエネルギーの相互作用における科学的諸過程について、量子素過程から物質集合体間の反応にいたるまで、ミクロとマクロの両視点を結ぶ幅広い学域の教育・研究を行います。あわせて、エネルギー資源の合理的利用技術の化学的原理と手法を追求します。
核エネルギー学 (協力講座)	中性子基礎科学 熱輸送システム工学	核変換エネルギーの安全かつ効率的な発生・利用システムの開発を目的として、核変換エネルギー発生システムの学理と設計方法、さらにはエネルギー輸送・貯蔵技術の新しい原理と手法を追求します。
先進エネルギー生成学	(客員講座)	第一線の研究者を指導教官に迎え、エネルギーの生成・変換に関わる新しい原理の発見、先進的学理の探求、さらには先導的技術基盤の構築などについての教育・研究を行います。

授業科目

修士課程	博士後期課程
● エネルギー基礎科学特別実験及び演習第 1, 2, 3, 4 ● Fundamental Energy Science Advanced Seminar on Energy Science I, II, III, IV ● 研究論文 ● エネルギー基礎科学通論 ● エネルギー無機化学 ● エネルギー材料科学 I ● エネルギー材料科学 II ● 機能固体化学基礎論 ● 無機固体化学 ● エネルギー基礎科学計算プログラミング ● 電磁流体物理学 I ● 電磁流体物理学 II ● プラズマ波動論 I ● プラズマ波動論 II ● プラズマ粒子運動論 ● 高温プラズマ物理学 ● プラズマ計測学	● エネルギー物理化学特論 ● エネルギー材料科学特論 ● 機能固体化学特論 ● プラズマ動力学特論 ● 先進エネルギー生成学特論 I ● 先進エネルギー生成学特論 II ● 先進エネルギー生成学特論 III ● エネルギー基礎科学特論 I ● エネルギー基礎科学特論 II ● 特別学外実習プロジェクト

■ エネルギー反応学

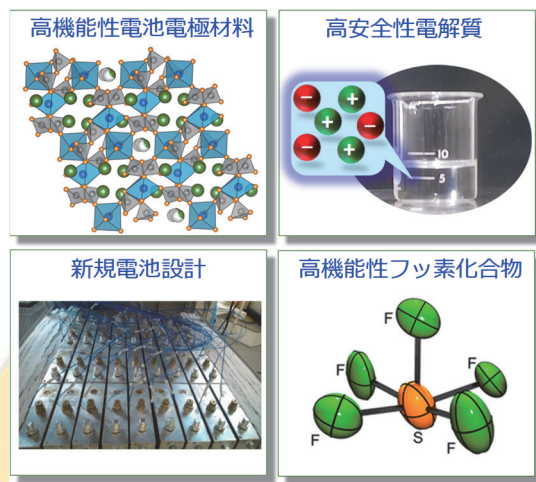
分子・原子レベルでの エネルギー科学

エネルギー化学

太陽光発電や風力発電などの再生可能エネルギーを本格導入するためには、電力貯蔵用大型二次電池の開発が必要です。エネルギー化学分野では無機化学、電気化学、物理化学などを基盤として、新規な電極材料、電解質、電池設計を行い、豊富な資源を利用した安全な二次電池の開発を行っています。また、高度な合成技術を生かした高機能性フッ素化合物の開発も行っています。これらの研究を通して、物質、材料、デバイス、システムに関する基礎から応用までの幅広い研究を行い、このような分野で活躍できる人材の育成を目指します。

(e-mail: matsumoto.kazuhiko.4c@kyoto-u.ac.jp)

(松本 一彦 教授、黄 珍光 助教)



エネルギー化学分野の研究概要

■ エネルギー反応学

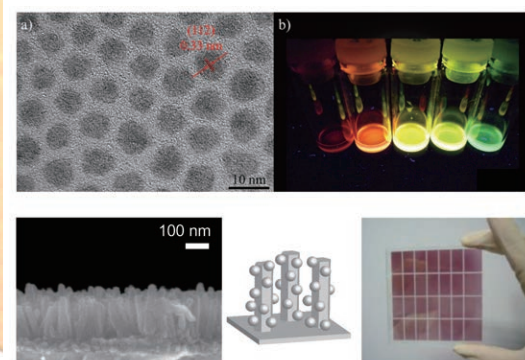
量子化された状態を巧みに利用する エネルギー変換材料を創る

量子エネルギープロセス

自然光である太陽光や人工光であるレーザーを利用する材料について研究しています。有機分子および無機半導体で構成される構造に光を照射したときの、励起状態から基底状態に戻る緩和過程での発光、発電、あるいはそのほかの仕事を高効率に引き出すような新材料およびプロセスを設計し、エネルギー変換デバイスへの応用を図ります。とくに、有機および無機材料からなるナノサイズの構造体を開発し、集光、偏光、光電変換、電荷輸送、貯蔵、あるいは発光などの重要な機能の発現を目指した基礎科学研究を行っています。

(e-mail: sagawa@energy.kyoto-u.ac.jp)

(佐川 尚 教授、蜂谷 寛 准教授、岡崎 豊 助教)



量子ドット（上）とナノロッドアレイ（左下）およびその複合材料（下中央）と太陽電池モジュール（右下）

■ エネルギー反応学

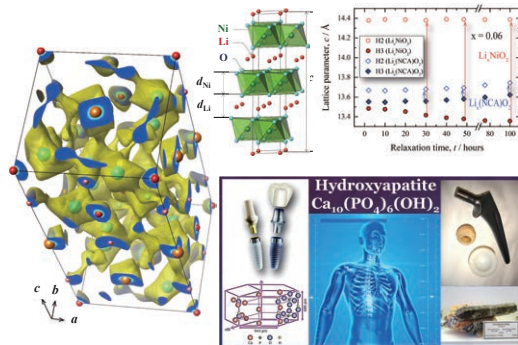
エネルギーと環境のための 機能性固体材料の創製

機能固体化学

エネルギーおよび環境のための機能性固体材料の解析、設計並びに合成に関する研究を行っています。高いエネルギー変換効率を持ち、資源の有効利用並びに環境保護に優れた電気化学エネルギーは、今後一層重要なエネルギー源となります。結晶化学、固体化学の理論に基づき、新しい材料の精密な解析や設計を行い、リチウムイオン二次電池や燃料電池等の材料開発を行っています。またソフトエネルギープロセスとして期待される、水溶液からの機能性セラミックス薄膜合成や生物の持つ高い環境調和機能を活用するセラミックバイオマテリアルの開発、またこれら材料の特性がさらに発揮されるナノ・マイクロ構造制御について研究しています。

(e-mail: stakai@energy.kyoto-u.ac.jp)

(高井 茂臣 准教授、藪塚 武史 講師)



固体酸化物形燃料電池電解質材料の導電パス(左)とリチウム電池電極材料の緩和解析(右上)、セラミックバイオマテリアルの開発(右下)

■ エネルギー物理学

核融合エネルギーの実現
理論プラズマ物理学の探求

プラズマ・核融合基礎学

宇宙で最も普遍的な物質状態である「プラズマ」は、高い自由度を有する荷電粒子多体系です。カーボンニュートラルなエネルギー源として期待されている「核融合エネルギー」はそのプラズマを燃料とすることから、非線形・非平衡物理によって支配されるプラズマのダイナミクスを理解することは、核融合研究において最も重要な研究課題とされています。私たちは、スーパーコンピュータによる数値シミュレーションや理論物理を用いて、「核融合エネルギー」の早期実現を目指した世界最先端のプラズマ研究を行っています。

(e-mail: ishizawa@energy.kyoto-u.ac.jp)

(石澤 明宏 教授、今寺 賢志 准教授、松井 隆太郎 助教)

■ エネルギー物理学

プラズマ物理と先端技術をつなぐ
核融合エネルギーシステムの研究

電磁エネルギー学

超高温プラズマを磁場で閉じ込め、自由に制御することは、核融合エネルギーの利用を実現するために極めて重要な研究です。大電力機器や超伝導、精密計測からAIに至るまで、先端技術を結集して作られる1億度の超高温プラズマでは、常識では考えられない興味深い現象が見られ、その理解には、プラズマの実験的研究と理論的研究を効果的に融合して進めなければなりません。当分野では、プラズマの不安定性（ディスラプション）や相対論的電子生成に関する理論研究、閉じ込め性能を改善する最適磁場構造の研究、核融合炉の運転や設計を支えるシステム科学や統合シミュレーションの研究などに世界各国の実験や最先端の炉工学研究と連携して取り組んでいます。(e-mail: matsuyama.akinobu.3p@kyoto-u.ac.jp)

(松山 顕之 准教授)

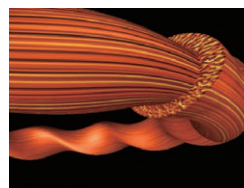
■ エネルギー物理学

マイクロ波帯電磁波動による
プラズマ物理の探求

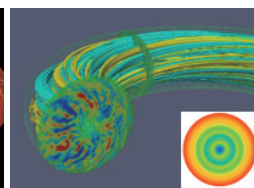
プラズマ物性物理学

マイクロ波帯電磁波動によりプラズマを生成・加熱し、さらに電流をプラズマ中に誘起して、プラズマの磁気流体的、及び運動論的振る舞いを実験を通して研究しています。特に、マイクロ波のみによる低アスペクト比トーラスプラズマの形成実験は、中心ソレノイドを省いた単純構造の球状トカマク型核融合炉の実現に寄与するものです。ここでは、電子サイクロトロン共鳴加熱によりプラズマ着火を行うとともにプラズマ中に高速電子群を生成してプラズマ電流を駆動します。外部コイルによる開いた磁力線にこの電流の作る磁場成分が加わり、プラズマ閉じ込め磁場が形成されます。これは、プラズマ波動物理・運動論、磁力線トポロジーと輸送、およびプラズマ平衡・安定性が相互に関連して発展する複合過程であり、プラズマ物理・理工学研究の宝庫となっています。(e-mail: m-uchida@energy.kyoto-u.ac.jp)

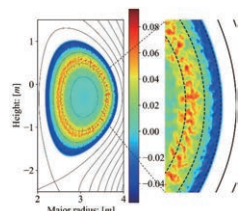
(打田 正樹 准教授)



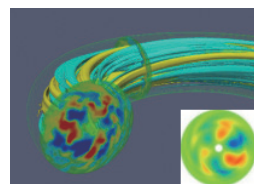
核融合プラズマ中の乱流



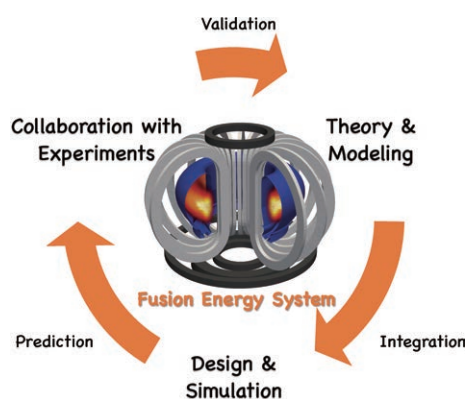
核融合プラズマ中の乱流。
自己組織的に形成された
環状流を伴う（右下）



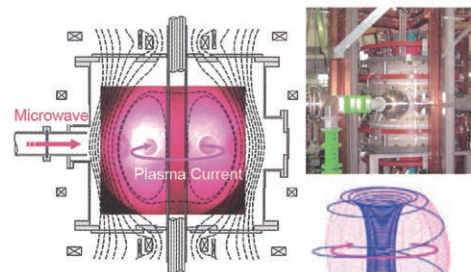
核融合炉を想定した非円形
断面プラズマ中の乱流



磁場構造形成を伴う（右下）
核融合プラズマ中の乱流



プラズマ物理やシステム科学、
計算機シミュレーションを駆使した
核融合エネルギーシステムの最適化



マイクロ波球状トカマク

プラズマ閉じ込め磁力線

低アスペクト比トーラス実験装置における
マイクロ波球状トカマク形成実験

エネルギー基礎科学専攻

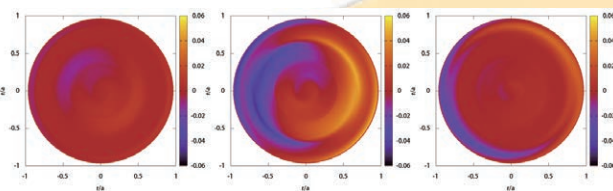
■ 基礎プラズマ科学

プラズマ核融合を実現するための 高温プラズマ物性研究

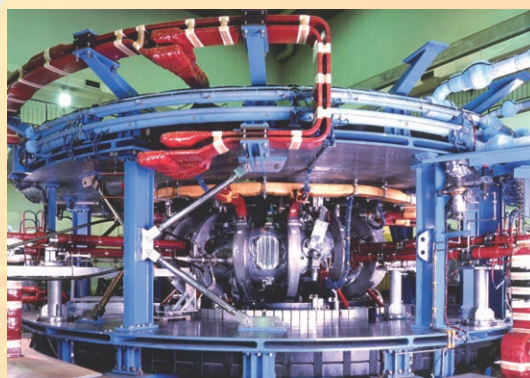
高温プラズマ物性

将来のベースロード電源候補である核融合エネルギーの実現を目指し、京大発のヘリオトロン磁場方式をさらに発展・最適化することで超高温プラズマを安定に閉じ込める事を目標にします。そのために多様で複雑な超高温プラズマの振る舞いを、ヘリオトロン実験によって解明します。高精度計測装置を開発し、閉じ込め磁場トポロジ効果、不純物輸送、乱流現象、プラズマ境界層現象などを観測し、理論・シミュレーションと共同して超高温プラズマのマクロな物性をミクロな荷電粒子集団の協同現象として理解し、核融合プラズマの予測・制御へと進展させます。

(稲垣 滋 教授、門 信一郎 准教授、金 史良 助教)



ビーム放射分光法によって計測した
プラズマ断面の密度揺らぎの時間発展
不安定性が発生するたびに形成・消失する
揺らぎのらせん構造を非線形解析で解明



高温プラズマ閉じ込め装置 Heliotron J

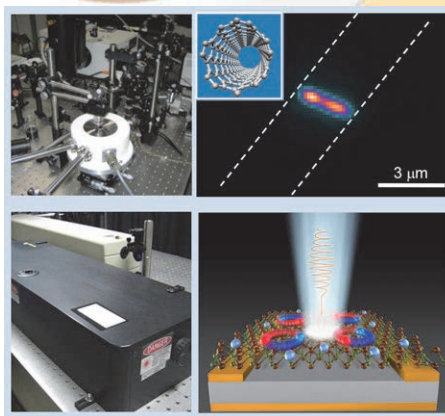
■ 基礎プラズマ科学

ナノサイエンスに立脚した光科学と エネルギー応用

エネルギー光物性

持続的に発展可能な社会の実現に向けて、社会受容性の高いエネルギー研究の重要性が増しています。本分野では、「ナノサイエンスに立脚した光科学の学理追求とそのエネルギー応用」を目標に掲げ、物性物理・物質科学・デバイス工学を基盤として研究を進めています。将来の光エネルギー応用に向けて、従来の延長線上にはない「極限ナノ物質」、「量子光物性」、「デバイス機能」などの新しい要素を取り入れる事が必要不可欠となっています。我々は、わずかな原子数層の薄さのカーボンナノチューブ・グラフェンや原子層物質などの極限ナノ物質を対象に、そこで発現する特異な量子光学現象とその背景にある物理の理解を通して、高効率な太陽電池の実現など新しい光科学やエネルギー科学の地平を目指して研究を展開しています。

(松田 一成 教授、俣野 真一郎 助教)



先端レーザー分光システムと
極限ナノ物質の光学イメージ等

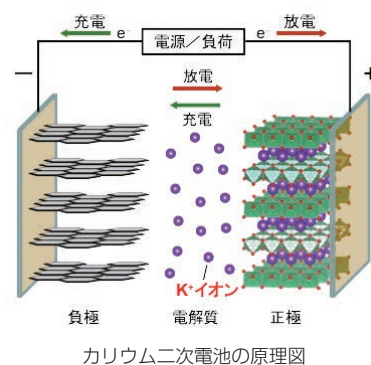
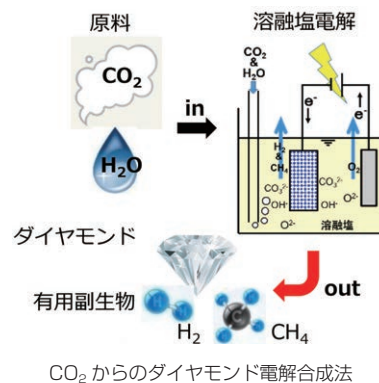
■ エネルギー物質科学

カーボンニュートラル社会を目指した
電気化学的アプローチ

界面エネルギープロセス

2050年カーボンニュートラル社会の実現を目指して、再生可能エネルギーの普及やCO₂ネガティブエミッションに貢献する革新的技術の研究開発を行っています。溶融塩やイオン液体を電解液に用い、電気化学反応を利用した新たな材料合成プロセスやエネルギー変換デバイスの開発を目指します。例えば、CO₂からダイヤモンドやグラファイトなどの高付加価値炭素材料を合成する溶融塩電解法や、シリコン太陽電池を電解めっきで作製する方法を開発しています。また、難燃性・難揮発性を持つイオン液体を用い、ナトリウム・カリウムなど豊富に存在する資源を利用することで、安全性の高い再生可能エネルギー貯蔵用二次電池の開発を目指しています。

(野平 俊之 教授、山本 貴之 講師、法川 勇太郎 助教)



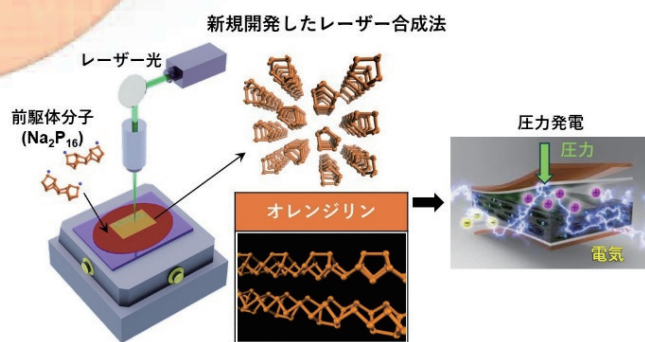
■ エネルギー物質科学

エネルギー利用を目指した
分子組織化と機能開発

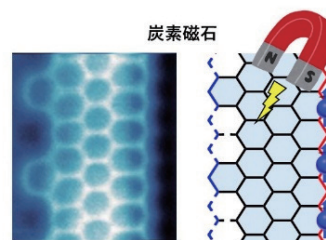
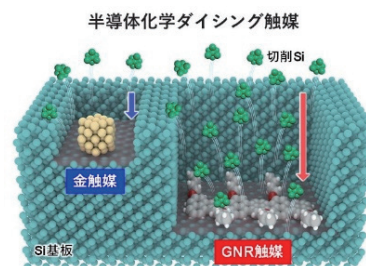
エネルギーナノ工学

ナノ工学とは、原子や分子を積み木のように組み立て、これまでにない機能や効率を持つ材料を創造する、究極の“ものづくり”の科学技術です。本研究室では、化学を基盤としボトムアップアプローチにより、エネルギー応用を目指した革新的な材料の開発に取り組んでいます。具体的には、従来の半導体後工程を革新する化学ダイシング触媒となる炭素細線、レアアースを代替する炭素磁石の開発、発電する新規リン化合物の合成、水や二酸化炭素をエネルギー資源へと変換する高活性触媒の開発など、多岐にわたる最先端の研究を展開しています。

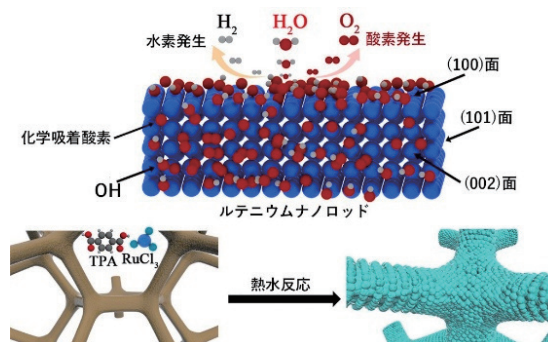
(坂口 浩司 教授、小島 崇寛 准教授、信末 俊平 助教)



発電する新規リン同素体 (オレンジン)



炭素細線による
半導体化学ダイシング触媒 (上)、炭素磁石 (下)



高活性触媒による水の電気分解



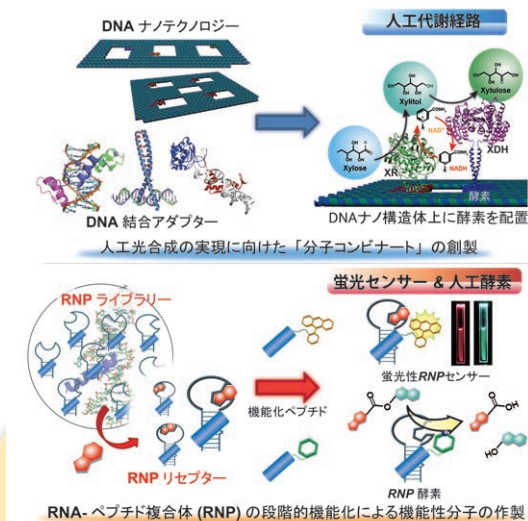
■ エネルギー物質科学

生物のエネルギー利用機能を化学で理解する

エネルギー生物機能化学

常温・常圧・水中でのクリーンで高効率な生物のエネルギー利用を支えるタンパク質・酵素など生体高分子を作りかえて、持続可能社会を支えるエネルギー利用システムの実現を目指します。有機化学と生物化学を駆使して「分子認識」、「触媒」、「ナノ構造形成」などの機能を持つ生体高分子を構築する方法論を確立し、テラーメイド酵素や細胞内シグナル分子伝達を計測する蛍光センサーを作製する研究、そして、人工光合成の実現に向けて、段階的な化学反応を組み合わせた人工代謝経路「分子コンビナート」をタンパク質・酵素ナノ構造体によって構築する研究を行っています。

(中田 栄司 准教授、Rajendran Arivazhagan 講師、Peng Lin 助教)



人工光合成の実現を目指したタンパク質・酵素ナノ構造体による分子コンビナートの開発 (上)。機能性RNA-ペプチド複合体の開発 (下)。

■ エネルギー物質科学

木質バイオマスの有効活用と病気に関連した生命現象の理解

生体エネルギー科学

生物あるいは酵素の力を用いる事で、木質バイオマスからバイオエネルギーと高付加価値物質を、効率的かつ有害物質を排出する事なく獲得する方法の開発を行っています。最終的には石油リファイナリーからバイオリファイナリーへのパラダイムシフトを見据えています。また、病気に関連した核酸やタンパク質をヒト細胞に導入し、この細胞を生きたまま核磁気共鳴装置 (NMR) に入れてスペクトル (インセルNMRスペクトル) を取得する事で、病気に関連した生命現象を理解し、創薬に向けた基盤を獲得する研究も行っています。いずれの研究においても、分子・原子レベルの分解能での解析を行っています。

(片平 正人 教授、永田 崇 准教授、近藤 敬子 准教授、山置 佑大 助教)



生物・酵素の力を用いた木質バイオマスからのバイオエネルギーと高付加価値物質の獲得及びヒト生細胞の直接解析に基づいた病気に関連した生命現象の理解。

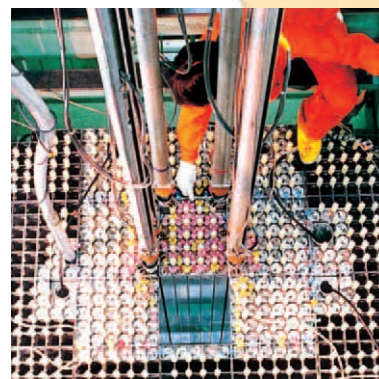
■ 核エネルギー学

次世代を目指した高機能核エネルギー発生機構の探求

中性子基礎科学

より安全かつ高機能な核エネルギー発生・利用システムの開発を目指して、中性子を利用した核変換エネルギー発生システムの学理と設計手法を追求します。具体的には、核廃棄物の核変換処理システム、トリウム燃料炉などの次世代型高機能原子炉の設計、核燃料取扱施設の臨界安全性を向上させる手法、新しい放射線計測システムの開発とその応用、などの研究を小型の原子炉等を用いた実験と数値シミュレーションを組み合わせで行います。

(三澤 毅 教授、北村 康則 准教授)



臨界集合体を用いた実験風景

■ 核エネルギー学

熱流体科学の新展開、極限の科学と
革新の技術

熱輸送システム工学

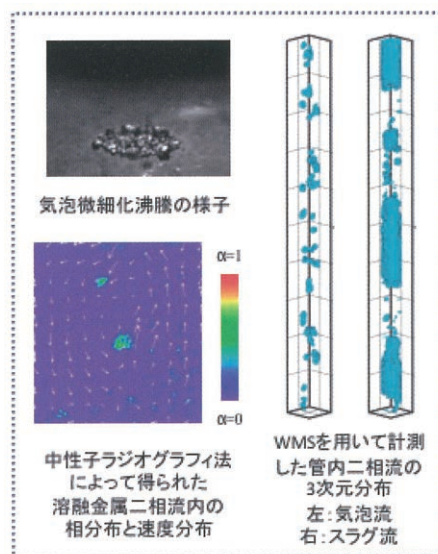
21世紀のエネルギー源として必要不可欠な、地球環境に調和した核エネルギー利用システムの開発を目指し、将来の核エネルギー利用システムで発生する高密度の熱流を、安全かつ高効率に利用するための基礎研究を行っています。具体的には、核分裂炉の安全性向上に関する研究、加速器駆動未臨界炉の熱水力設計に関する基礎研究、超高熱負荷除熱に関する基礎研究、混相流現象の特性とその制御・利用に関する基礎研究、粒子線画像情報を利用した新しい流体計測技術に関する研究等、理論的、実験的研究を行っています。

(齊藤 泰司 教授、伊藤 啓 准教授、卞 哲浩 准教授、伊藤 大介 助教、大平 直也 助教)

■ 客員講座 先進エネルギー生成学

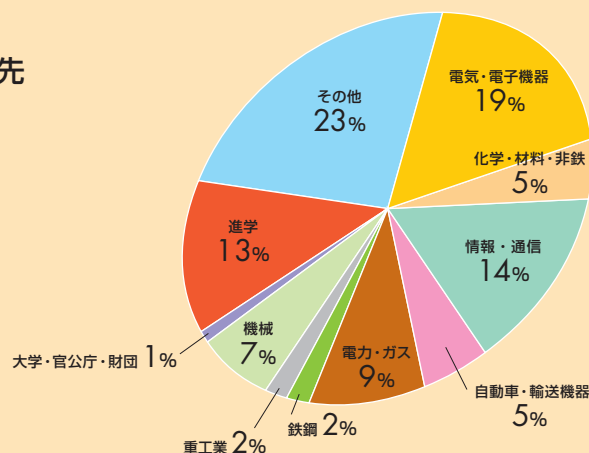
エネルギー・環境問題の解決のための
産官学連携の推進

エネルギー・環境問題は、日本の国家・国民にとってきわめて重要で、その解決には産官学の一体となった協力が不可欠です。エネルギーの基礎的学理の発展を踏まえ、将来のエネルギー・環境の持続的産業社会構築に向けて、産業界の動向を含めた経済的観点を交えて研究するとともに、これらの技術開発に関して産官との連携を推進します。

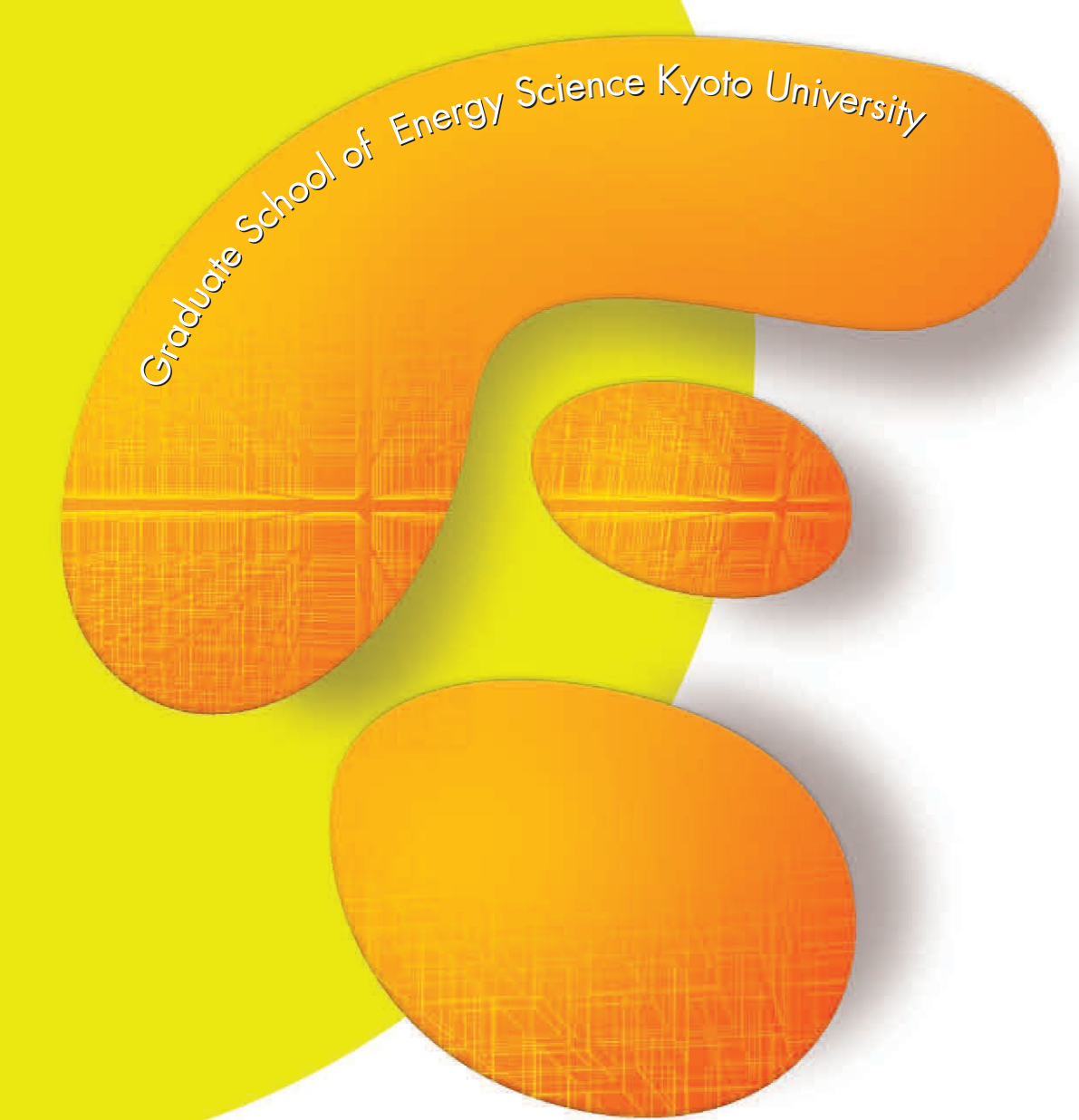
エネルギー基礎科学専攻
過去3年間の修士課程修了者就職先

＜主な就職先＞

JFEスチール株式会社
株式会社エヌ・ティ・ティ・データ
三菱重工業株式会社
関西電力株式会社
パナソニック株式会社



その他の内訳…運輸業(1%)、その他製造業(6%)、サービス業(5%)、金融・保険業(2%)、その他(未定など)(9%)



Graduate School of Energy Science Kyoto University

Department of Energy Conversion Science

エネルギー変換科学専攻

未来のエネルギー変換システムとその機能設計

地球環境と共生できる人間社会の発展に資することを
目的とした高効率クリーンエネルギーシステムの構築を目指して
各種エネルギーの発生、変換、制御、利用などに関する学理と
その総合化について、理工学的立場から
教育・研究を行います。

講 座 説 明

講 座 名	分 野 名	内 容 説 明
エネルギー変換システム学	熱エネルギー変換 変換システム	エネルギーの変換、輸送、機能設計、構成要素に関わる基礎学理を統合して、高効率、安全かつ環境に調和するエネルギー変換システムのあり方を探求するとともに、評価、設計、制御などの基礎とその方法論を構築するための教育・研究を行います。
エネルギー機能設計学	エネルギー材料設計 機能システム設計	エネルギーを高効率で変換、輸送、貯蔵するために、各種機器とそれらで構成されるシステム全体が具備すべき機能、その変換の多様化のための原理、またシステムのハードウェア構築に必要な材料、機器およびソフトウェアの設計、その信頼性と安全性の基礎と応用についての教育・研究を行います。
エネルギー機能変換 (協力講座)	高度エネルギー変換 プラズマエネルギー変換 エネルギー機能変換材料	高効率、安全かつ環境に調和するエネルギーの変換プロセスの解明とシステムの構築のために、エネルギーの発生・変換・貯蔵・利用に関する学理の確立とその応用・評価、ならびに機能変換システムについて、核融合、光量子、熱化学、先進原子力、エネルギー材料など、多面的な視点から教育・研究します。
先進エネルギー変換	(客員講座)	環境への負荷が小さく高効率なエネルギー変換方法の考案と、それを実現するシステムの設計・開発を目指し、エネルギー変換に伴う物理・化学現象の解明と制御、ならびにエネルギー機器材料の特性解析、機器の健全性評価などについて教育・研究を行います。

授 業 科 目

修士課程

- エネルギー変換科学特別実験及び演習第 1, 2, 3, 4
- エネルギー変換基礎通論
- 速度過程論
- 熱機関学
- 熱エネルギーシステム設計
- 燃焼理工学
- システム強度論
- 塑性力学
- 連続体熱力学
- 核融合エネルギー基礎
- 先進エネルギーシステム論
- 粒子エネルギー変換

- 電磁エネルギー変換
- 機能エネルギー変換材料
- エネルギー変換材料学
- エネルギー材料評価学
- 金属結晶学
- 原子力プラント工学
- エネルギー変換科学学外研究プロジェクト
- 特別基礎科目 1
- 特別基礎科目 2
- 学際的エネルギー科学特別セミナー
- 産業倫理論

博士後期課程

- エネルギー変換基礎特論
- 熱流体・燃焼の数値解析
- 連続体熱力学
- 原子力プラント工学特論
- 特別学外実習プロジェクト
- Advanced Energy Conversion Science

■ エネルギー変換システム学

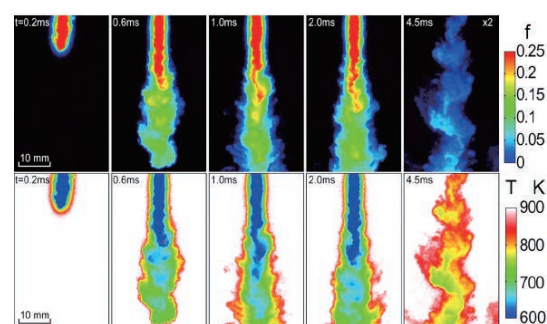
熱エネルギー変換機器の最適化と 環境インパクトの低減

熱エネルギー変換

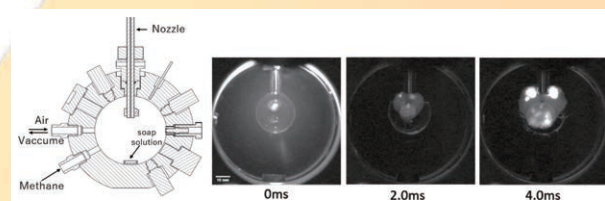
高効率、安全かつ環境に調和した熱エネルギー変換システムの設計・制御を目的として、燃焼反応を伴った熱流体力学に関連する研究を実施しています。主要な研究テーマは次の通りです。

- (1) 均一および不均一混合気のプラズマ支援点火・燃焼
- (2) 燃焼過程で生じる有害排出物の生成機構
- (3) 燃焼場におけるレーザー計測および画像解析
- (4) 小型宇宙機用スラスタ内部における伝熱および相変化
- (5) 高温反応流体の基礎

(林 潤 教授、富所 拓哉 助教)



局所当量比の瞬時分布計測結果の例



定容容器における点火・燃焼の解析

■ エネルギー変換システム学

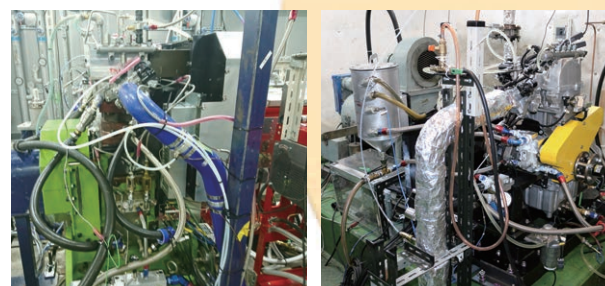
エネルギー変換システムの 最適設計と制御

変換システム

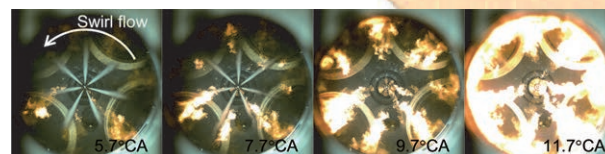
カーボンニュートラル社会の実現に向けて、システムの高効率化、水素や合成燃料などの新燃料の有効活用、ならびに環境影響物質の発生機構の解明とその低減に関する研究を行う。主要な研究テーマは次のとおりである。

- (1) 水素やそれをもとに製造される合成燃料などの新燃料を用いる機関の熱効率向上と排気浄化に関する研究
- (2) ディーゼル機関、火花点火機関などの燃焼過程と環境影響物質（微粒子、窒素酸化物など）の生成機構の解明
- (3) 燃焼改善、排気浄化処理による環境影響物質の抑制技術の研究
- (4) 熱発生率経過および有害物質生成の予測を目的とした燃焼モデルの開発とその検証
- (5) 乱流火炎における熱流体力学

(川那辺 洋 教授、堀部 直人 准教授)



単気筒エンジン



ボトムビュー可視化エンジンによる火炎挙動の解析

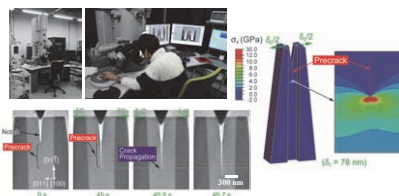
■ エネルギー機能設計学

微小材料の変形・破壊・物性に関する
マルチスケールメカニクス

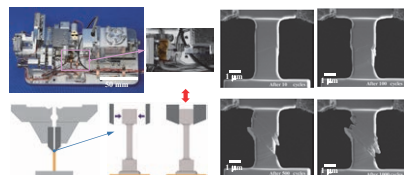
エネルギー材料設計

ナノ・マイクロサイズ材料には、未知の力学特性（変形・強度・破壊・マルチフィジックス特性など）が発現することが知られています。エネルギー変換機器における次世代型ナノテクノロジー設計への応用を目標に、これらの特性を実験的・解析的に解明することを目指しています。世界最先端の実験装置・技術及び解析手法を用いて、(1) ナノ・マイクロ材料特有の変形・破壊・疲労特性の解明、(2) 薄膜被覆材の界面強度・疲労強度特性の解明、(3) 電磁気材料のマルチフィジックス特性のモデル化、(4) ナノ構造体（強誘電体やモット絶縁体）のマルチフィジックス特性の解明などを行っています。さらには、(5) 材料に人工的な構造を付与することで自然界の物質では達成できない特性を発現させるメカニカルメタマテリアルの変形・破壊挙動についても研究を行っています。

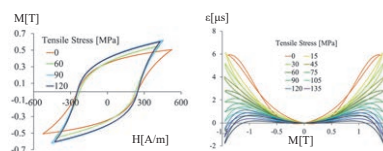
（澄川 貴志 教授、安部 正高 准教授、河合 江美 講師）



透視型電子顕微鏡内の破壊実験の様子と
応力解析結果



マイクロ金属材料に対する引張圧縮疲労実験



電磁気材料のマルチフィジックス解析

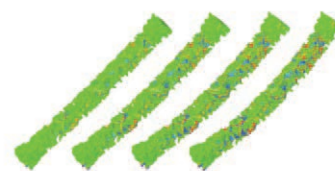
■ エネルギー機能設計学

先進機能材料システムの設計と
健全性の非破壊評価

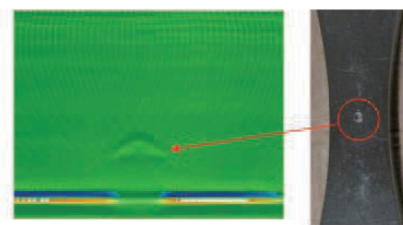
機能システム設計

エネルギー変換システムをはじめとして、さまざまな分野の機器や構造物の高度化や多様化が進むにしたがって、それらを構成する材料には強度だけでなく、耐熱性、制振性、電磁氣的、光学的物性などの機能や、形状記憶効果、圧電効果などの能動的特性、高温、電磁場など極限環境下における耐久性や信頼性が要求されます。このような材料の特性や挙動を非線形連続体力学によって統一的に定式化し、理論や数値解析・シミュレーションなどの方法を用いて解明することで、より高機能で知的な材料システムを設計、創製することを目指しています。また、材料のモデリングならびに超音波や電磁場を利用した機能の劣化、損傷・欠陥などを評価する非破壊計測技術の開発にも力を入れています。

（今谷 勝次 教授、木下 勝之 准教授）



発泡金属の曲げ変形と崩壊プロセスの
直接シミュレーション



フェーズドアレイ超音波システムによる
試験片内部の可視化

Energy
エネルギー
変換科学
専攻

■ エネルギー機能変換

核融合炉のアセスメントと 核融合エネルギー応用

高度エネルギー変換

21世紀は化石資源からの脱却と地球環境問題の解決、途上国を中心とする持続可能な開発が必要とされており、今世紀半ば以降の抜本的なエネルギーシステムの構築にあっては核融合に代表される革新的エネルギー技術の開発および高度先端科学技術の発展が不可欠です。

本分野では、核融合を中心とする未来型エネルギー技術について、グローバルな環境と安定成長の両立を果たす革新的エネルギーとしての実用化像を示すことを目的とした研究を、実験とシミュレーション、システム設計、分析および評価により進めています。特に、水素エネルギー・リサイクル社会への適合を目指した高効率核融合エネルギー変換技術として、先進ブランケット研究、プラズマ対向機器研究、水素製造・バイオマス転換プロセス研究、プラントシステム設計解析を行う一方、核融合プラズマ技術の応用として、放電型核融合中性子源や小型中性子ビームの研究などを進めています。さらにエネルギーシステム評価では、技術的側面にとどまらず、生物・環境、経済・社会、人文科学的視点も含めた環境影響評価、経済評価、社会受容性問題、エネルギー政策の面で総合的な持続可能性（サステナビリティ）の検討を行います。

(八木 重郎 准教授)



核融合エネルギーシステムのつくる未来のゼロエミッションリサイクル社会。核融合は資源リサイクルによる水素と電力により地球環境と資源問題の解決に重要な役割を果たす。

Future zero-emission recycle society with fusion energy system. Fusion plays significant role in resource recycle, hydrogen production, and electricity generation to solve the global environment and resource problem.

■ エネルギー機能変換

電磁波・荷電粒子相互作用を用いた プラズマエネルギーの生成・変換

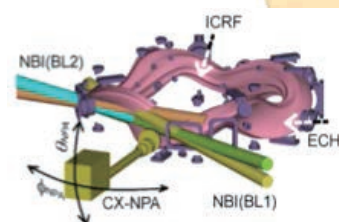
プラズマエネルギー変換

本分野では、荷電粒子と電磁界の相互作用を高度・高精緻に制御することにより、21世紀の人類に計り知れない恩恵をもたらす磁場閉じ込めプラズマ核融合の基礎研究を進めています。ジャイロトロンを用いた電子サイクロトロン共鳴加熱による高温プラズマの生成・加熱・電流駆動、MHD不安定性の抑制に加え、大型イオン源を用いた中性粒子ビーム入射による高密度プラズマの生成・制御、および閉じ込め改善に関する研究を進めています。高温プラズマ中に発生する揺動は熱・粒子輸送の悪化をもたらす事が予想されており、その物理機構の理解が重要です。そのため、マイクロ波や動的ビーム分光などを用いた高度なプラズマ診断装置の開発や揺動解析による輸送の理解を進めています。

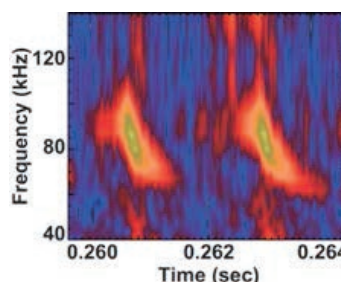
(長崎 百伸 教授、小林 進二 准教授、稲垣 泰一郎 助教)



高パワーマイクロ波源ジャイロトン



大電力イオン源を用いた中性粒子ビーム入射と動的ビーム分光法による高度プラズマ計測



不安定性制御・抑制による磁場閉じ込めプラズマの高性能化

Department of Energy Science and Technology

エネルギー応用科学専攻

人類の持続的発展のための地球環境調和型プロセスの展開と
それを支えるエネルギー応用科学の確立

エネルギーの応用と利用に関する熱科学の基礎と応用、
およびエネルギーを有効に利用するための新プロセスと機器の開発とその基礎原理の解析、
高品位エネルギーと先端エネルギーの応用についての新技術の開発を目指して、
これらを支える資源エネルギー安定供給システムの創出、エネルギー材料プロセッシング
およびエネルギーの開発に付随する諸現象の解明と探求、
ならびにこれらを支える基礎科学について教育・研究を行います。

講 座 説 明

講 座 名	分 野 名	内 容 説 明
エネルギー材料学	エネルギー応用基礎学 プロセスエネルギー学 材料プロセス科学 プロセス熱化学	エネルギーの応用と利用に関する熱科学の基礎と応用に関して、諸現象の解明と探求、また、これらを支える基礎科学について、ならびにエネルギーを有効に利用するためのエネルギー材料の創製・開発・プロセッシング、またその基礎原理について教育・研究を行います。
資源エネルギー学	資源エネルギーシステム学 資源エネルギープロセス学 ミネラルプロセッシング	資源エネルギー安定供給システムの創出、高効率エネルギープロセスの開発、さらにエネルギー材料プロセッシングについての教育・研究を行います。
高品位エネルギー応用 (協力講座)	機能エネルギー変換 エネルギー材料物理 光量子エネルギー学	社会的受容性の高い基盤エネルギーの発生と応用、またエネルギー機能変換について、新技術の開発を目指した教育・研究を行います。
先端エネルギー応用学	(客員講座)	新しいエネルギーとして考えるエネルギーの開発と利用、再生可能なエネルギーについて原理、実現のための必要事項、方法などについて教育・研究を行います。

授 業 科 目

修士課程

- エネルギー応用科学特別実験及び演習第 1, 2, 3, 4
- エネルギー応用科学通論
- Advanced Energy Science and Technology
- 半導体デバイス工学論
- 材料プロセッシング
- 機能素材プロセッシング
- 熱化学
- 資源エネルギーシステム論
- 数値加工プロセス
- 計算物理
- 物理化学特論
- 光量子エネルギー論
- 電磁エネルギー学
- エネルギー有効利用論
- 先進エネルギー論
- 学外研究プロジェクト
- 特別基礎科目 1
- 特別基礎科目 2
- 学際的エネルギー科学特別セミナー
- 産業倫理論

博士後期課程

- エネルギー応用プロセス学特論
- 資源エネルギーシステム学特論
- 先進エネルギー学特論
- 光量子エネルギー特論
- 特別学外実習プロジェクト
- Advanced Energy Science and Technology

エネルギー応用科学専攻

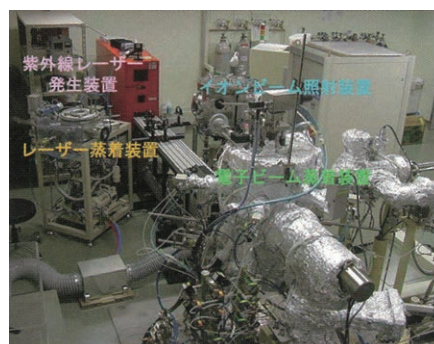
■ エネルギー材料学

最先端エネルギー応用デバイスに関する研究

エネルギー応用基礎学

エネルギーの効率的利用および自然エネルギー活用のための各種高機能デバイスの実用化を目指し、材料が本来持つ特性を極限まで引き出す新しいプロセス技術の開発および基礎研究を行っています。現在は、超伝導体、半導体、電池を研究対象として、これらの結晶をレーザー、電子ビーム、イオンビームを駆使して結晶方位制御することで飛躍的に高い性能を得ることを目指しています。またレーザーを用いた高度な計測技術を用いてデバイス特性の精密評価を行っています。

(土井 俊哉 教授、池之上 卓己 准教授)



結晶方位制御薄膜作製装置システムの外観

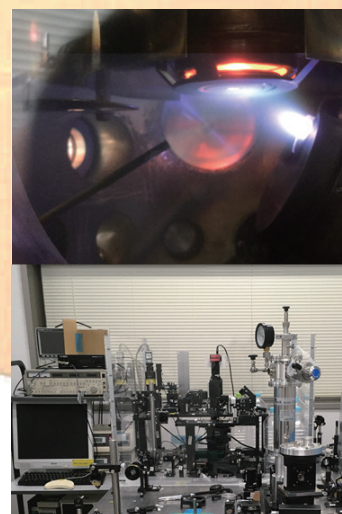
■ エネルギー材料学

高性能エネルギー材料・デバイス開発と、先端分光計測による機能・物性評価

プロセスエネルギー学

高度な薄膜作製プロセスを用いたエネルギーデバイス開発およびテラヘルツ波を用いた材料・デバイスの特性評価技術を用いて、高性能・高機能なエネルギー材料・デバイスを実現することを目指しています。具体的には、性質や構造が異なる金属や酸化物を積層可能である高度な薄膜形成技術を駆使し、これまで組み合わせることができなかった材料を用いた高性能な二次電池の開発に取り組んでいます。また、開発した材料・デバイスの高性能化のため、テラヘルツ波を利用した独自の分光計測技術を用い、非接触・非破壊で試料内部の電氣的・磁氣的性質を評価しています。

(川山 巖 准教授)



パルスレーザー蒸着による成膜の様子（上）と
テラヘルツ分光・イメージングシステム（下）

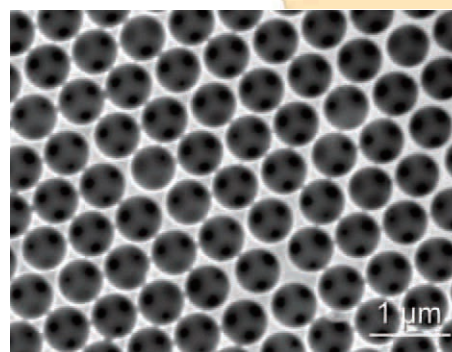
■ エネルギー材料学

エネルギー材料の創製、 省エネルギープロセス

材料プロセス科学

太陽電池や二次電池などのエネルギーデバイスには様々な材料が用いられますが、材料の形態や構造を制御することで、より高い機能をもつ材料を創り出すことができます。例えば、電池の電極を多孔質化すると、電池性能が飛躍的に向上します。また、光の波長と同程度の周期をもつ周期構造体（フォトニック結晶、右写真）は、高度な光制御を可能とし、太陽電池やLEDの高効率化を実現する材料として期待されています。このような高機能なエネルギー材料をより環境に優しく創り出すことができる材料プロセスの構築を目指し、基礎・応用研究を行っています。

(三宅 正男 教授)



ZnO 三次元フォトニック結晶

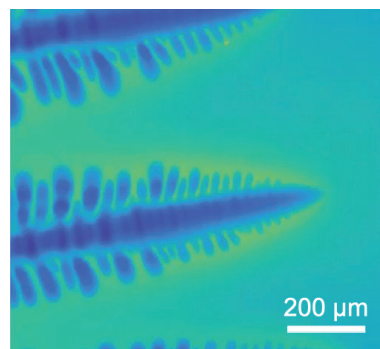
■ エネルギー材料学

高温プロセスを制御し、
省エネルギー化に貢献する

プロセス熱化学

当研究室では、環境負荷を最小限に抑えた金属製精錬プロセスの提供や、太陽電池やパワー半導体などエネルギーの有効利用に欠かせない材料の開発を目指して研究を進めています。いずれの研究でも、高温プロセスを如何に制御するかが課題解決への鍵であり、化学熱力学や速度論を活用して検討を進めています。当研究室で得意とする成分活量の測定やその場観察により高温現象を明らかにし、プロセスの高効率化や材料の高機能化を追求しています。

(長谷川 将克 准教授、川西 咲子 准教授)



凝固過程のその場観察

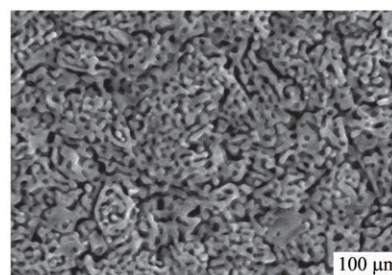
■ 資源エネルギー学

次世代社会を切り拓く
エコ金属、ナノ金属

資源エネルギーシステム学

当研究室では、近未来における資源、エネルギー、環境に関する材料の基礎的研究を行っています。省資源・省エネ化に貢献するエコ金属（超軽量マグネシウム合金とそのアップグレードリサイクル）、低炭素社会実現に資するナノ金属（水素吸蔵ナノポーラス金属、強磁性ナノ結晶金属等）、資源エネルギーの安定供給に向けた岩石の破壊特性や間隙構造の解析等の研究に取り組んでいます。特に、実実験とシミュレーションによる仮想実験の融合に力を入れています。

(馬淵 守 教授、袴田 昌高 准教授、WU, Peizheng 助教)



エネルギー材料として期待される
ナノポーラス金属



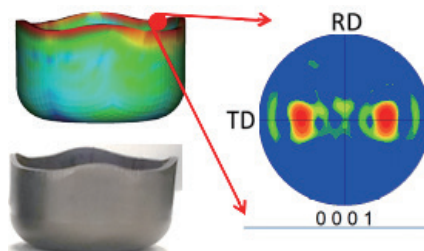
■ 資源エネルギー学

マルチスケール計算力学の応用による省資源化、
省エネルギー化への貢献

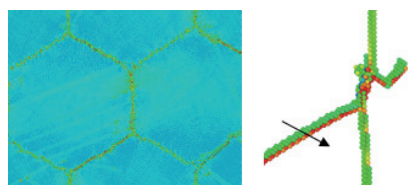
資源エネルギープロセス学

持続可能な社会の構築には、素材から製品を加工、利用するまでの一連のプロセスにおいて省資源化、省エネルギー化を促進することが重要です。当研究室では、金属板をはじめとする素材の加工プロセスに焦点を当て、幅広い時空間スケールを対象とした高度な計算力学と実験技術を駆使することで、その実現に向けた基礎的、実用的研究に取り組んでいます。その成果は、輸送機器の軽量化に資する難加工材のモデリングやその成形性の向上、また高い成形性を有する素材の創製などに生かされます。

(浜 孝之 教授、宮澤 直己 助教)



純チタン板の円筒絞り成形に関する実験と
マルチスケール結晶塑性シミュレーション



成形に際し金属内部で生じる
微視的変形に関する分子動力学シミュレーション

■ 資源エネルギー学

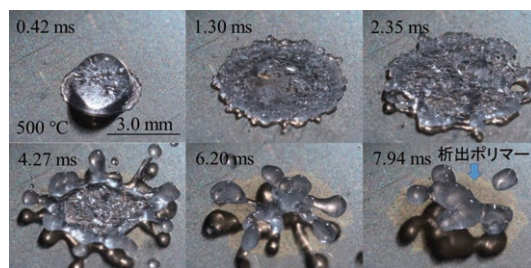
資源・素材、環境の諸問題に貢献する ミネラルプロセッシング

ミネラルプロセッシング

人類が今後も安全に暮らしていくためには、地球環境に配慮した素材開発、資源エネルギーの安定供給、および資源精製・循環プロセス技術の構築が必要です。私たちは、資源・素材さらに環境に関わる以下のようなさまざまな問題に取り組んでいます。

- 1) 素材製造プロセスにおける混相流の物質・熱輸送現象の解明と熱制御技術の構築
- 2) 資源エネルギーの安定供給に向けた岩石の破壊特性や間隙構造の解析
- 3) 分離工学に基づく環境浄化や資源リサイクルプロセスの高度化・高効率化に関する研究

(藤本 仁 教授、陳 友晴 准教授、日下 英史 助教)



高温金属面上のポリマー水溶液液滴の変形・沸騰挙動

■ 高品位エネルギー応用

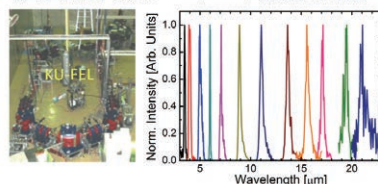
高品位量子放射エネルギー源の開発と その機能材料への応用

機能エネルギー変換

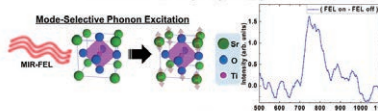
高品位で高輝度の電子ビームを発生させ、その運動を高度に制御し電磁場と相互作用させると、極めて高い付加価値を持つ量子放射ビームを発生させることができます。自由電子レーザーはその代表で、波長・偏光可変、高効率、高出力といった長所があります。私たちは赤外線領域の自由電子レーザーやTHz光源を開発し、それを光物性や生体化学反応等の応用に使用する研究を行っています。またレーザ逆コンプトン散乱ガンマ線、再生可能エネルギー導入のための国際共同研究やエネルギーシステム研究も行っています。

(大垣 英明 教授、全 炳俊 准教授、Ju Yoon Hnin Bo 助教、Jordi Cravioto 特定助教)

赤外波長可変レーザーの開発と応用



STOのLO3格子振動の選択励起

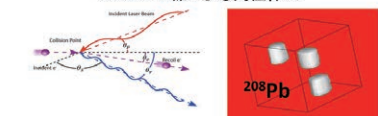


THz-FEL装置の開発



高エネルギー量子放射ビーム開発

LCSガンマ線による同位体CT



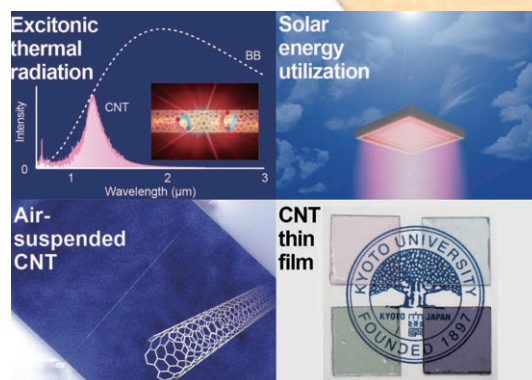
■ 高品位エネルギー応用

ナノスケール・量子材料の物性・機能と エネルギー応用

エネルギー材料物理

持続可能なエネルギー社会実現に資する新しい太陽光・熱エネルギー高効率利活用技術の創成を目指して、カーボンナノチューブをはじめとするナノスケール・量子材料の物性・機能とそのエネルギー応用に焦点を当てた研究を行っています。これらの材料の特異な物性を根本原理に立ち戻って理解し、さらにそれを基礎として従来の材料の限界を超える優れたエネルギー機能を引き出す学理を確立するために、物性物理学や材料合成に関する基礎科学から、熱・機械・電子・光工学とそれらに資するマクロスケール集積材料の創成までを対象とした学際研究を推進しています。

(宮内 雄平 教授)



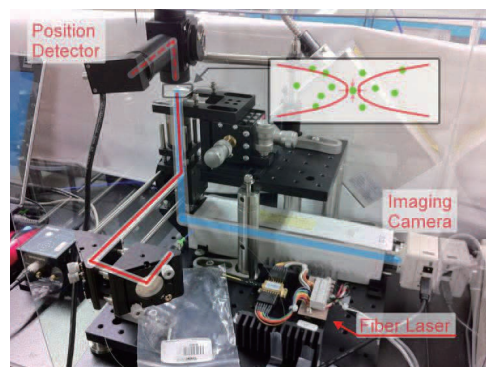
■ 高品位エネルギー応用

高機能・高品質な光エネルギーの
発生・制御・利用

光量子エネルギー学

レーザーが発明されてから半世紀以上も経った今では、レーザーはごく一部の人が使う特殊な装置ではなく、物質のその場観察・創製から産業応用に至るまで、実に幅広い分野で欠くことのできないツールとなっています。我々のグループでは、様々な光誘起現象のダイナミクス理解を土台として、新規非線形光学現象の探索やナノ粒子・ナノ薄膜・ナノバブルの光学応答制御に関する研究を行っています。

(中嶋 隆 准教授)



レーザートラップ装置

■ 客員講座 先端エネルギー応用学

エネルギー応用科学の最先端とエネルギーの有効利用

国内外から著名な教育研究者が客員教授、客員准教授として招かれ、エネルギー応用科学の最先端とエネルギーの有効利用の具体例が紹介される。先端集積回路の開発設計への先進エネルギーの応用例や、プラズマを用いた新しい材料や新材料加工法の開発例、エネルギー資源探査・評価の最先端と動向、超伝導材料の最先端など国際レベルにおける現状と課題、展望などが講述される。

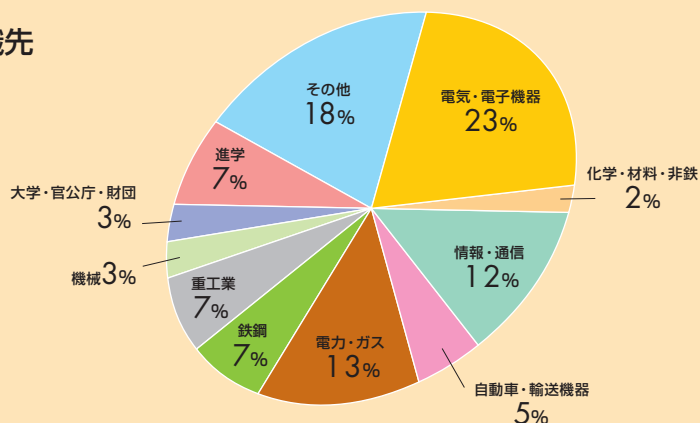


エネルギー応用科学専攻

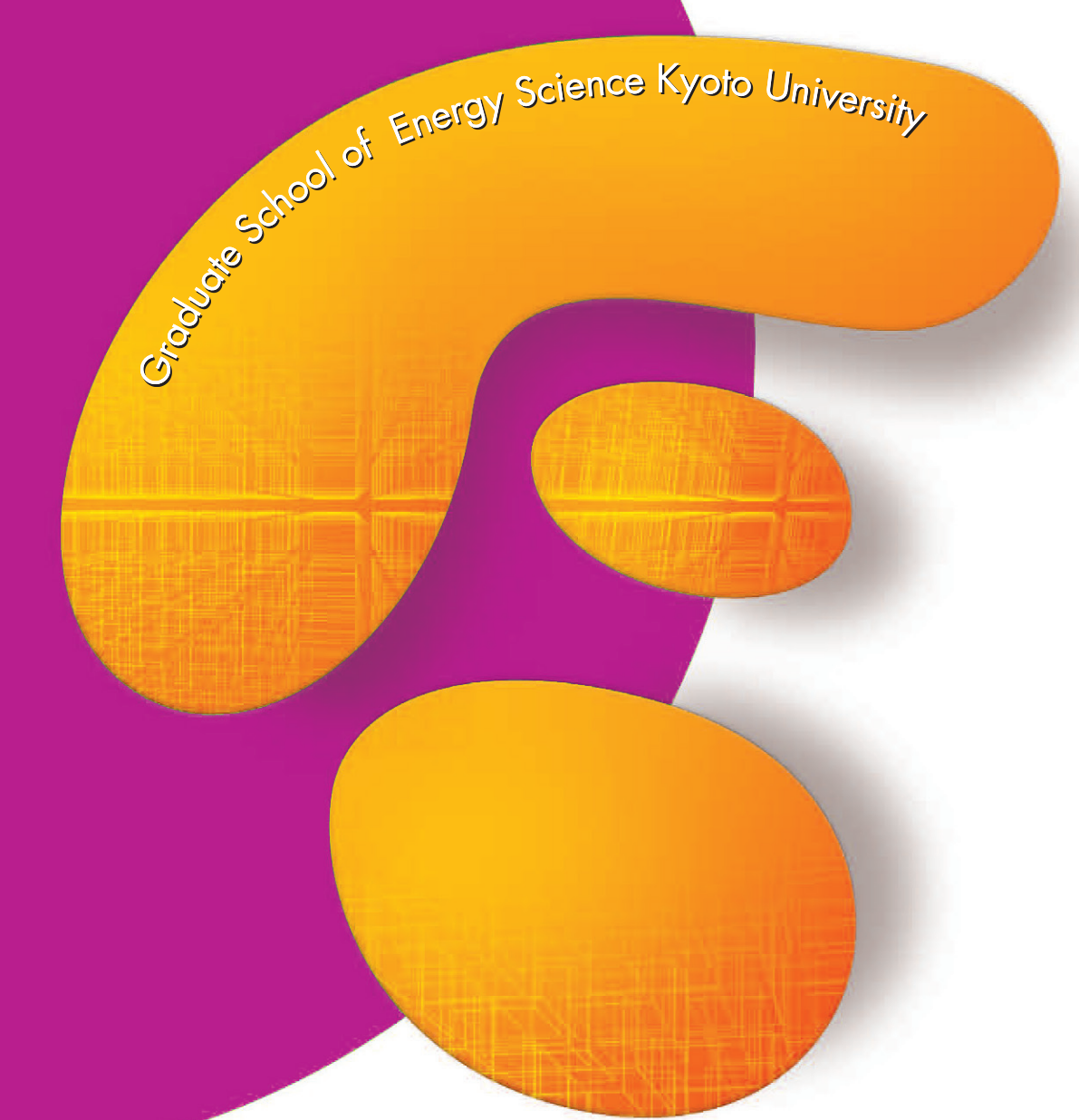
過去3年間の修士課程修了者就職先

＜主な就職先＞

関西電力株式会社
住友電気工業株式会社
川崎重工株式会社
日本製鉄株式会社
株式会社JERA



その他の内訳…運輸業(4%)、その他製造業(1%)、サービス業(6%)、商社(1%)、金融・保険業(3%)、その他(未定など)(3%)



Graduate School of Energy Science Kyoto University

International Advanced Energy Science Research and Education Center (IAESREC)

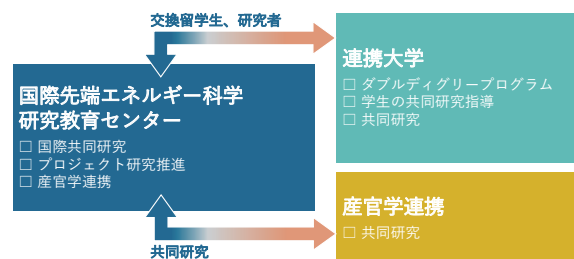
国際先端エネルギー科学研究教育センター

国境を越えてエネルギーと向き合う国際研究拠点

世界トップクラスの大学との現地運営型研究室（オンサイトラボラトリー）構築や
ダブルディグリー制度の促進を図り、大学間学術交流協定校の増加、
国際共同研究の推進などを通じたグローバル人材育成を支援します。

セ ン タ ー 説 明

国際先端エネルギー科学研究教育センターは、研究及び教育における国際連携強化を目的として設立しました。当センターは、研究機器の共同利用や、プロジェクト研究推進、産官学連携、博士課程のダブルディグリー制度の定着・発展など、様々な役割を担っています。また、世界トップクラスの大学とオンサイトラボラトリーを構築、大学間学術交流、双方の留学生の派遣、国際共同研究の推進等を通じて、グローバル人材育成、先進的な研究成果をあげ、より社会に貢献することが期待されます。



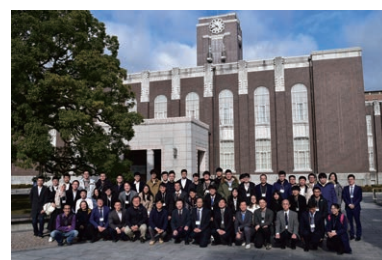
【国際共同研究・グローバル人材育成の支援】

研究・教育の両面における国際化の重要性が益々高まっている背景を踏まえ、エネルギー科学研究科では、マラヤ大学（マレーシア）、チュラロンコン大学（タイ）、キングモンクット工科大学トンブリ校（タイ）、ボルドー大学（フランス）、浙江大学（中国）など世界各国の大学とのダブルディグリー制度（双方の大学の学位を取得できる制度）を設けております。さらに、2023年よりアンタナナリボ大学（マダガスカル）との学生交流プログラムが確立されています。国際共同研究の遂行にあたり、双方の現地での研究活動支援が重要となります。当センターが保有する実験室には、電解放出形走査型電子顕微鏡（FE-SEM）、X線光電子分光分析装置（XPS）、マトリクス支援レーザー脱離イオン化飛行時間型質量分析装置（MALDI-TOF/MS）をはじめとする計17の共同利用設備があり、これらの装置群を活かして、受入れ留学生の研究支援に積極的に取り組んでおります。これまで本制度を通じて、エネルギー科学研究科から6名を海外に派遣、22名を海外の大学から受入れており、既に19名が双方の学位を取得しております（2025年2月現在）。また、留学生の受け入れ強化及び日本人学生の国際性の向上を目的とした国際エネルギー科学コース（International Energy Science Course：IESC）に、当センター教員による英語講義を提供しております。その他、科学の話題を英語で議論するサイエンスカフェや、アジアを中心とする世界各国からの学生を受け入れて開催される各種セミナー、国内外の研究者や学生の研究設備見学の支援など、研究科の国際化に貢献しています。当センターはこれらの活動を通じて、国際共同研究及びグローバル人材育成の更なる推進を目指します。

（専任教員：上田 樹美 助教、ラベマヌンツ ハリファラ フェヌハシナ 特定助教、Jo Ju-Yeon 特定助教）



共同利用設備を用いた研究補助



京都 - 浙江 - アジュ三大学エネルギー科学
合同シンポジウム集合写真

授 業 科 目

IESC 科目

（*当センター教員担当科目）

- Computational Methods for Material Science*
- Polymer Chemistry for Energy Science*
- Renewable Energy: Present and Future*
- Energy System Analysis and Design
- System Safety
- Energy Policy
- Future Energy: Hydrogen Economy
- Energy, materials and resources
- Energy Systems and Sustainable Development
- Simulation and Data Science
- Advanced Energy Conversion Science
- Fusion Energy Science and Technology
- Energy Conversion Systems and Functional Design

エネルギー科学研究科の関連分野

						工学系										農学系
						土木・建築・環境	機械	電気	金属	資源	化学	原子核	数理・情報	林（産工）学		
専攻	講 座	分 野	教 授	准 教 授	助 教											
エネルギー社会・環境科学	社会エネルギー科学	エネルギー社会工学		奥村 英之、小川 敬也	SHAH, Syed Shaheen	○	○	○	◎	○	○					
		エネルギー経済	Benjamin C. McLellan	尾形 清一		○	○	○	◎	◎	○	○	○	○		
		エネルギーエコシステム学	河本 晴雄	南 英治		○				○	○			◎		
	エネルギー社会環境学	エネルギー情報学	下田 宏	石井 裕剛		○		◎				○	◎			
		エネルギー環境学	亀田 貴之	AU, Ka Man	土屋 望	◎			○	○	○		○	○		
	エネルギー社会論	エネルギー政策学 **	宇根崎博信		高橋 佳之			○	○		○		◎	○		
		エネルギー社会教育 **	黒崎 健	上林 宏敏	孫 一帆、外山 真理	◎	○	○	◎	○	◎	○	○			
客員講座 国際エネルギー論		客員教授	客員准教授		◎	○		○	○	○		○				
エネルギー基礎科学	エネルギー反応学	エネルギー化学	松本 一彦		黄 珍光			○	○	◎	◎					
		量子エネルギープロセス	佐川 尚	蜂谷 寛	岡崎 豊			○	○	○	◎					
		機能固体化学		高井 茂臣、薮塚 武史（講師）				○	○	○	◎					
	エネルギー物理学	プラズマ・核融合基礎学	石澤 明宏	今寺 賢志	松井隆太郎			◎				○	◎			
		電磁エネルギー学		松山 顕之				◎				◎	◎			
		プラズマ物性物理学		打田 正樹				○				○				
	基礎プラズマ科学	高温プラズマ物性 *	稲垣 滋	門 信一郎	金 史良			◎				○	○			
		エネルギー光物性 *	松田 一成		俣野真一朗			◎	○		○					
	エネルギー物質科学	界面エネルギープロセス *	野平 俊之	山本 貴之（講師）	法川勇太郎			○	○	○	◎	○				
		エネルギーナノ工学 *	坂口 浩司	小島 崇寛	信末 俊平		○	○	○	○	◎					
		エネルギー生物機能化学 *		中田 栄司、Rajendran Arivazhagan（講師）	Peng Lin						◎					
		生体エネルギー科学 *	片平 正人	永田 崇、近藤 敬子	山置 佑大						○					
	核エネルギー学	中性子基礎科学 **	三澤 毅	北村 康則				○	○		○		◎	○		
		熱輸送システム工学 **	齊藤 泰司	伊藤 啓、卞 哲浩	伊藤 大介、大平 直也		◎	○			○	◎	○			
	客員講座 先進エネルギー生成学		客員教授					○	○		○	○				
エネルギー変換科学	エネルギー変換システム学	熱エネルギー変換	林 潤		富所 拓哉		◎			○	○			○		
		変換システム	川那辺 洋	堀部 直人		○	◎				○		○			
	エネルギー機能設計学	エネルギー材料設計	澄川 貴志	安部 正高、河合 江美（講師）		○	◎	○	◎							
		機能システム設計	今谷 勝次	木下 勝之		○	◎	○	○				○			
	エネルギー機能変換	高度エネルギー変換 *		八木 重郎		○	○	◎	○	○	○	◎	○	○		
		プラズマエネルギー変換 *	長崎 百伸	小林 進二	稲垣泰一郎		○	◎				○	○			
		エネルギー機能変換材料 *		森下 和功			◎		◎		○	◎				
客員講座 先進エネルギー変換		客員教授	客員准教授		○	○		○	○	○		○				
エネルギー応用科学	エネルギー材料学	エネルギー応用基礎学	土井 俊哉	池之上卓己				◎	◎		○					
		プロセスエネルギー学		川山 巖			◎	◎	○		○					
		材料プロセス科学	三宅 正男						○	◎	○					
		プロセス熱化学		長谷川将克、川西 咲子		○		○	◎	○	○					
	資源エネルギー学	資源エネルギーシステム学	馬淵 守	袴田 昌高	WU, Peizheng	○	○		◎	◎						
		資源エネルギープロセス学	浜 孝之		宮澤 直己		◎		◎	○			○			
		ミネラルプロセス学	藤本 仁	陳 友晴	日下 英史	○	◎		○	◎	○					
	高品位エネルギー応用	機能エネルギー変換 *	大垣 英明	全 炳俊	Ju Yoon Hnin Bo, Jordi Cravioto		○	○	○		○	◎	○			
		エネルギー材料物理 *	宮内 雄平			○	◎	◎	◎	◎	◎	○	○			
		光量子エネルギー学 *		中嶋 隆			◎	◎	◎	◎	◎	○				
客員講座 先端エネルギー応用学		客員教授				○	○	○	○	○						
国際先端エネルギー科学研究教育センター					上田 樹美 Harifara Rabemananjato, Jo Ju-Yeon			◎	○	○	◎		○	◎		

* エネルギー理工学研究所

** 複合原子力科学研究所

森林(資源)科学	応用生物学	生物環境学	理学系 物理学	化学	生物学	数学	地質鉱物学	経済学系 経済学	経営学	法学系 政治学	法学	教育学系 教育学	社会学系 社会学	社会心理学	
			○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	リサイクル、応用熱力学、環境材料、エネルギー・資源の有効利用と評価、環境教育
○	○	○	○	○		○	○	◎	◎	◎	○	○	◎	○	エネルギーシステム学、エネルギー需給、エネルギーガバナンス、資源、LCA、ネクス、社会受容性
◎	○	○		○	○			○							バイオマスエネルギー、超臨界流体、熱分解、バイオリファイナリー、バイオケミカルス
						○		○		○		○	○	○	ヒューマンインターフェース、エネルギーシステム、情報システム、拡張現実感、コミュニケーション設計
○	○	○	○	○	○		○					○			大気環境、エアロゾル、有害化学物質、環境影響評価、地球温暖化
			○			○		○		○		○			エネルギー政策、原子力エネルギー、核燃料サイクル、トリウム、超ウラン元素、核セキュリティ
			○	○								○			マテリアルズ・インフォマティクス、原子力エネルギー、核燃料、地震工学、防災戦略、耐震評価
			○	○		○						○			環境動態モデル、気象/大気質シミュレーション、東南アジア大気環境管理
			○	○											イオン液体、電気化学、エネルギー貯蔵材料、二次電池、電解質、フッ素化学
	○	○	○	◎	○										有機分子材料、無機半導体、光化学、固体物理学、光物理学、カイラリティ、コロイド科学
	○	○	○	◎	○	○	○								無機材料化学、無機固体化学、材料電気化学、二次電池、燃料電池、生体材料学、バイオセラミックス
			◎			○									核融合プラズマ、高エネルギー密度プラズマ、宇宙プラズマ、非線形物理、大規模シミュレーション
			◎			○									プラズマ電磁エネルギー、プラズマ放射、プラズマ診断、非線形物理、複雑系物理
			◎												プラズマ物理、プラズマ動力学、高周波加熱、非中性プラズマ、非線形物理
			◎			○									プラズマ物理学、核融合炉心制御、プラズマ輸送制御、プラズマエネルギー制御、核融合システム
			◎	○											ナノサイエンス・テクノロジー、物性物理、太陽電池デバイス、量子エレクトロニクス、データ駆動科学
				◎											電気化学、溶融塩、イオン液体、機能性材料、シリコン太陽電池、二次電池
	○	○	○	○	○	○									ナノテクノロジー、ナノ材料、電気化学、合成化学、太陽エネルギー利用、有機太陽電池
	○	○		◎	○										バイオエネルギー、シンセティックバイオロジー、生物有機化学、人工光合成
○	○	○	○	○	○										構造生物学、バイオマス、バイオエネルギー、核磁気共鳴、タンパク質科学
			○			○									原子炉物理、核設計、新型原子炉、臨界安全、放射線計測、核変換工学
			○			○									熱流体工学、核融合炉工学、原子炉工学、混相流理工学、流体計測
			○	○	○										エネルギー生成、エネルギー変換
															熱工学、燃焼理工学、レーザー・画像計測、大気汚染物質制御、プラズマ支援燃焼、代替燃料
															熱流体力学、動力工学、内燃機関、数値流体力学シミュレーション、代替燃料
			○												ナノ・マイクロ材料、材料強度学、疲労、マルチフィジックス、メタマテリアル、破壊力学
			○												機能材料と知的材料、連続体力学、計算力学、電磁材料、電磁波や超音波による非破壊測定
○		○	◎	○		○									プラズマ物理学、核融合工学、エネルギー利用、システム設計、環境影響、経済評価、核融合材料
			◎			○									プラズマ物理学、マイクロ波・高周波工学、中性粒子ビーム工学、プラズマ診断学
			○												先進原子力材料、機能材料物性、水素エネルギー、材料挙動シミュレーション、材料設計
			○												エネルギー変換
			○	○											エネルギー材料、結晶配向プロセス、ナノ組織制御、成膜プロセス、薄膜型電池、酸化半導体
			○	○											薄膜成長、薄膜型全固体電池、材料・デバイス評価、テラヘルツ分光
			○	◎											エコプロセス、溶液プロセス、機能性材料、電気化学、フォトリソグラフィ
			○	○											熱化学、凝固・結晶成長、環境調和型プロセス、金属製錬・リサイクル、エネルギー材料
			○				○								エコマテリアル、アップグレードリサイクル、材料ナノテクノロジー
			◎			○									加工プロセス、エコマテリアル、材料モデリング、成形シミュレーション
							○								熱流体工学、資源処理、分離工学
			◎	○	○	○		○					○		光量子ビーム、光物性、エネルギーシステム
			◎	◎											ナノ材料、量子材料、物性工学、エネルギー機能、太陽エネルギー利用、熱・光工学
			◎	◎											レーザー、非線形光学、光工学、ナノ材料、光応答制御
							○								エネルギー応用科学、エネルギーの有効利用
◎	○	○	○	◎	○								○	○	木材化学、バイオマス科学、リグニン化学、バイオリファイナリー、バイオマスエネルギー、バイオケミカルス、ワークプレイスデザイン、生理心理・行動計測、理論化学、計算化学、分子分光学

エネルギー科学研究科における入学から就職まで

アドミッションポリシー

エネルギー科学研究科 アドミッションポリシー

【修士課程】

エネルギーの確保並びに環境の保全は、人類の持続的な発展のための最も重要な課題である。本研究科は、このエネルギー・環境問題を解決するため、工学、理学、農学、経済学、法学などの多岐にわたる学問領域を結集して、世界に先駆けて創設された。本研究科は、エネルギー持続型社会形成を目指して、理工系に人文社会系の視点を取り込みつつ学際領域としてエネルギー科学の学理の確立をはかり、地球社会の調和ある共存に寄与する、国際的視野と高度の専門能力をもつ人材を育成することを理念として掲げている。そのような理念の下、本研究科ではカリキュラム・ポリシーに示す教育を行っている。こうした教育を実施するために、学部や大学、学生や社会人、国内や国外を問わず、以下のうち複数の条件を満たす学生を求める。

- (1) エネルギー科学の研究を通じて、エネルギー・環境問題の解決に貢献し、社会の発展に寄与するという意欲のある人
- (2) 既存概念にとらわれず新しい学問・研究に果敢に挑戦する、創造力にあふれた個性豊かな人
- (3) エネルギー科学の専門分野を学ぶために必要な基礎学力を身につけた人
- (4) エネルギー科学に関する研究を進めるための論理的思考力、表現力を身につけた人
- (5) 国内外のエネルギー科学関連分野の研究者と議論して研究を進めることができるコミュニケーション能力を持つ人

上記のポリシーを実現するため、本研究科では英語や論理的思考等の基礎学力とエネルギー科学関連の専門知識を評価する筆記試験、学士課程の成績等の書類審査、および口頭試問等を適宜組み合わせた多様な入学試験を実施する。

【博士後期課程】

エネルギーの確保並びに環境の保全は、人類の持続的な発展のための最も重要な課題である。本研究科は、このエネルギー・環境問題を解決するため、工学、理学、農学、経済学、法学などの多岐にわたる学問領域を結集して、世界に先駆けて創設された。本研究科は、エネルギー持続型社会形成を目指して、理工系に人文社会系の視点を取り込みつつ学際領域としてエネルギー科学の学理の確立をはかり、地球社会の調和ある共存に寄与する、国際的視野と高度の専門能力をもつ人材を育成することを理念として掲げている。そのような理念の下、本研究科ではカリキュラム・ポリシーに示す教育を行っている。こうした教育を実施するために、学部や大学、学生や社会人、国内や国外を問わず、以下のうち複数の条件を満たす学生を求める。

- (1) エネルギー科学の研究を通じて、エネルギー・環境問題の解決に貢献し、社会の発展に寄与する先端的研究を進める意欲のある人
- (2) 既存概念にとらわれず新しい学問・研究に果敢に挑戦する、創造力にあふれた個性豊かな人
- (3) エネルギー科学に関する研究を進めるための高度な専門知識、論理的思考力、表現力を身につけた人
- (4) エネルギー科学の研究者としての国際的視野と高度の専門能力を基盤に、課題・テーマを設定し、それを解決・展開できる研究能力を持つ人
- (5) 国内外のエネルギー科学関連分野の研究者に自らの研究をアピールし、相互に理解を深めることができる論理的説明能力とコミュニケーション能力を持つ人

上記のポリシーを実現するため、本研究科では英語や論理的思考等の基礎学力とエネルギー科学関連の高度な専門知識を評価する筆記試験、修士課程の成績・修士論文・研究計画等の書類審査、および口頭試問等を適宜組み合わせた多様な入学試験を実施する。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

エネルギー科学研究科 カリキュラムポリシー

【修士課程】

修士課程では、ディプロマ・ポリシーに掲げる目標を達成するために、以下の方針でカリキュラムを作成する。

- (1) 学士課程での教育によって得た基礎学力および専門性を発展させるとともに、専門分野にとらわれずに自然科学と人文社会科学の双方から分野横断的に学修するカリキュラムを編成・実施し、研究分野に関連する広い学識と専門知識を習得させる。各科目の学修成果は、筆記試験、レポート試験、演習・実験・実習成果等から評価する。
- (2) 研究指導、セミナー、実践的教育を介して、学術上あるいは實際上エネルギー科学に寄与する課題研究に積極的に取り組み修士論文を作成することを特に重視する。これにより、研究推進能力、研究成果の論理的説明能力、学術研究における高い倫理性を醸成するとともに、3名の調査委員により学修成果を評価する。

上記の教育方針を効果的に実施するため、講義、演習、実験、実習科目を適切に組み合わせ、各科目の内容や重要度等により、各専攻において必修・選択科目等を設定する。各専攻のカリキュラムの編成および各科目内容の詳細等は別途明示する。

【博士後期課程】

博士後期課程では、ディプロマ・ポリシーに掲げる目標を達成するために、以下の方針でカリキュラムを作成する。

- (1) 修士課程での教育によって得た広い学識と高度な専門的知識をさらに発展させるとともに、幅広い視野から自己の研究を位置づけて体系化を図ることができるカリキュラムを編成・実施し、エネルギー・環境問題を解決するための方法の確立と実践等に関するより高度な専門知識と研究技術を習得させる。各科目の学修成果は、筆記試験、レポート試験、演習・実験・実習成果等から評価する。
- (2) 研究指導、セミナー、実践的教育を介して、学術上あるいは實際上エネルギー科学に寄与する高度な課題研究に積極的に取り組み博士論文を作成することを特に重視する。これにより、優れた研究企画・推進能力、研究成果の論理的説明能力、学術研究における高い倫理性を醸成するとともに、3名の調査委員により学修成果を評価する。

上記の教育方針を効果的に実施するため、講義、演習、実験、実習科目を適切に組み合わせ、科目等を設定する。各専攻のカリキュラムの編成および各科目内容の詳細等は別途明示する。

学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

エネルギー科学研究科 ディプロマポリシー

【修士課程】

本学エネルギー科学研究科は、エネルギー・環境問題を解決し地球社会の調和ある共存に貢献する、国際的視野と高度の専門能力を持つ人材を育成することが社会から期待されている。そうした人材を育成するために、本研究科では、所定の年限在学し、カリキュラム・ポリシーに沿って設定した授業科目を履修して所定単位数以上の単位を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で執筆した修士論文の審査および試験に合格するとともに、次のような目標を達成したものに修士の学位を授与する。なお、学修・研究について著しい進展が認められる者については、在学期間を短縮して修士課程を修了することができる。

- (1) 専門基礎学力に基づいた広い視点と多角的な知見をもとに、エネルギー・環境問題の解決に貢献するための高度な専門知識を習得している。
- (2) エネルギー科学分野の学術研究における高い倫理性を備えている。
- (3) エネルギー科学分野の学識と技術・能力を基盤として課題・テーマを設定し、それを解決・展開できる研究推進能力を有している。
- (4) それぞれの専門あるいは関連する領域の研究者に自らの研究成果をアピールし、相互に理解を深めるための論理的説明能力とコミュニケーション能力を有している。
- (5) 執筆した修士論文が学術上あるいは實際上エネルギー科学に寄与する研究成果を有している。

【博士後期課程】

本学エネルギー科学研究科は、エネルギー・環境問題を解決し地球社会の調和ある共存に貢献する、国際的視野と高度の専門能力を持つ人材を育成することが社会から期待されている。そうした人材を育成するために、本研究科では、所定の年限在学し、カリキュラム・ポリシーに沿って設定した授業科目を履修して所定単位数以上の単位を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で執筆した博士論文の審査および試験に合格するとともに、次のような目標を達成したものに博士の学位を授与する。なお、学修・研究について著しい進展が認められる者については、在学期間を短縮して博士後期課程を修了することができる。

- (1) 高度な専門知識と広い学識をさらに発展させるとともに、幅広い視野から自己の研究を位置づけて体系化を図ることができ、エネルギー・環境問題の解決に貢献するための方法の確立と実践等に関するより高度な専門知識と研究技術を習得している。
- (2) エネルギー科学分野の学術研究における高い倫理性を備えている。
- (3) エネルギー科学分野の学識と技術・能力を基盤として独創的な課題・テーマを設定し、必要に応じて他の研究機関との共同研究を企画・実施してそれを解決・展開できる高度な研究企画・推進能力を有している。
- (4) それぞれの専門あるいは関連する領域の研究者に自らの研究成果を国際的にアピールし、相互に理解を深めるための論理的説明能力とコミュニケーション能力を有している。
- (5) 執筆した博士論文が学術上あるいは實際上エネルギー科学に寄与する特に優れた研究成果を有している。

学生募集

詳細は必ず令和8年度学生募集要項(令和7年4月頃公開予定)等を入手の上、熟読してから応募下さい。

I. 募集人員

●修士課程 130 名

●博士後期課程 35 名

	修士課程 130 名	博士後期課程 35 名
エネルギー社会・環境科学専攻	29 名	12 名
エネルギー基礎科学専攻	42 名	12 名
エネルギー変換科学専攻	25 名	4 名
エネルギー応用科学専攻	34 名	7 名

II. 出願資格

●修士課程

- ◎ 次の各号のいずれかに該当する者、あるいは令和8年3月末をもって該当する見込みの者
- (1) 大学を卒業した者（学校教育法第83条に規定する大学を卒業した者）
 - (2) 学校教育法第104条の第7項の規定により学士の学位を取得した者
 - (3) 外国において、学校教育における16年の課程を修了した者
 - (4) 外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した者
 - (5) 我が国において、外国の大学の課程（その修了者が当該外国の学校教育における16年の課程を修了したとされるものに限る。）を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了した者
 - (6) 外国の大学その他の外国の学校（その教育研究活動等の総合的な状況について、当該外国の政府又は関係機関の認証を受けた者による評価を受けたもの又はこれに準ずるものとして文部科学大臣が指定するものに限る。）において、修業年限が3年以上である課程を修了すること（当該外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該課程を修了すること及び当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって前号の指定を受けたものにおいて課程を修了することを含む。）により、学士の学位に相当する学位を授与された者
 - (7) 文部科学大臣が指定する専修学校の専門課程を文部科学大臣が定める日以後に修了した者
 - (8) 文部科学大臣の指定した者
 - (9) 大学に3年以上在学した者（学校教育法第102条第2項の規定により、これに準ずる者として文部科学大臣が定める者を含む。）であって、本学において、所定の単位を優れた成績をもって修得したものと認めた者
 - (10) 本学において、個別の入学資格審査により、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者で、22歳に達した者
- ◎ 出願資格(9)(10)により出願する者は、事前に出願資格の審査を受けなければならない。

●博士後期課程

- ◎ 次の各号のいずれかに該当する者、あるいは令和8年3月末をもって該当する見込みの者
- (1) 修士の学位又は修士（専門職）若しくは法務博士（専門職）の学位を有する者
 - (2) 外国において、本学大学院の修士課程又は専門職学位課程に相当する課程を修了した者
 - (3) 外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、本学大学院の修士課程又は専門職学位課程に相当する課程を修了した者
 - (4) 我が国において、外国の大学の大学院の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程（本学大学院の修士課程又は専門職学位課程に相当する課程に限る。）を修了した者
 - (5) 国際連合大学（国際連合大学本部に関する国際連合と日本国との間の協定の実施に伴う特別措置法（昭和51年法律第72号）第1条第2項の規定によるものをいう。）の課程を修了し、修士の学位に相当する学位を授与された者
 - (6) 外国の学校等において、博士論文研究基礎力審査に相当するものに合格した者であって、本学において修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
 - (7) 文部科学大臣の指定した者
 - (8) 本研究科において、個別の入学資格審査により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、24歳に達した者
- ◎ 出願資格(6)、(7)、(8)により出願する者は、事前に出願資格の審査を受けなければならない。

III. 試験日程

●修士課程 8月上旬及び9月下旬

（詳しくは令和8年度修士課程学生募集要項を参照してください）

●博士後期課程 8月上旬及び9月下旬

（詳しくは令和7年度10月期博士後期課程学生募集要項および令和8年度4月期博士後期課程学生募集要項を参照してください）

VI. 問い合わせ先

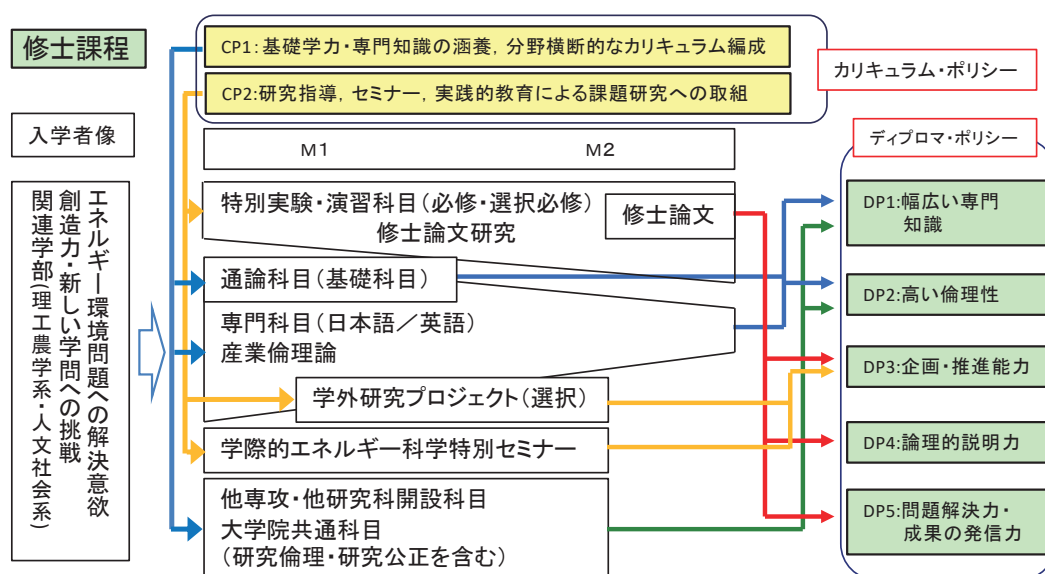
京都大学大学院 エネルギー科学研究科教務掛 〒606-8501 京都市左京区吉田本町 TEL 075-753-9212

履修について

●修士課程

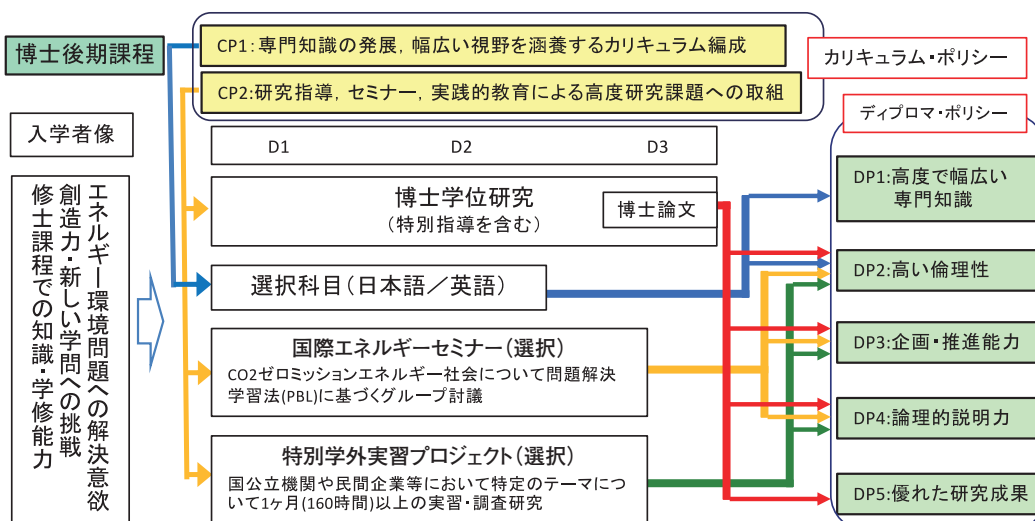
合計 30 単位（IESC45 単位）以上修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、修士論文の審査および試験に合格しなければなりません。

履修科目は所属する専攻の開設科目以外にエネルギー科学研究科内の他専攻の開設科目や他研究科の開設科目から広く選択することができるよう配慮されています。



●博士後期課程

エネルギー科学研究科科目を 4 単位以上履修し、かつ必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査および試験に合格しなければなりません。



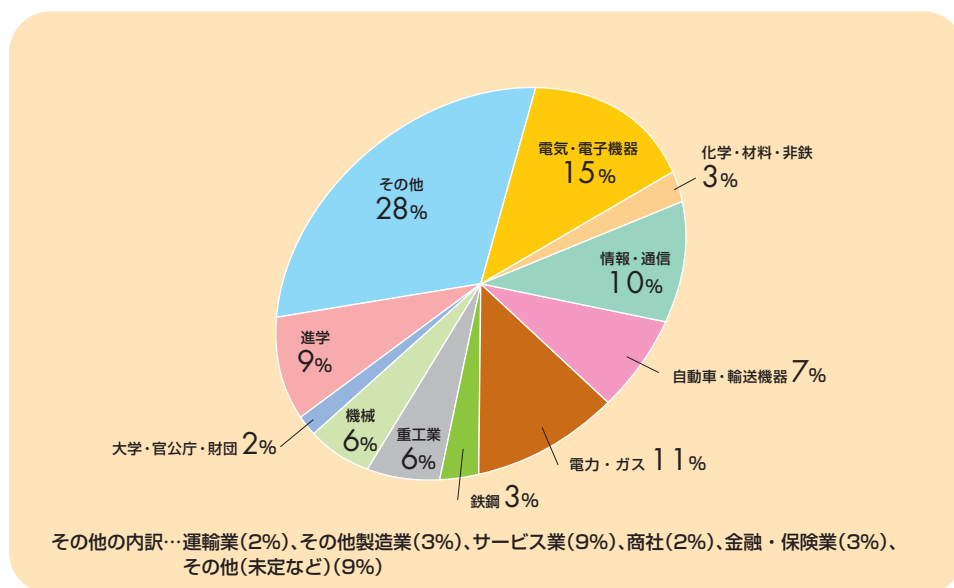
修士課程修了者数と博士学位授与者数

	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成31年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
修士課程修了者数	133	126	135	132	118	150	133	142	148	139	134
博士学位授与者数（課程）	19	15	18	17	24	12	17	27	14	21	21
博士学位授与者数（論文）	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0

修士課程修了者の就職先

産業別	修了年度	平成29年度	平成30年度	平成31年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
電気・電子機器		28	27	26	13	14	21	24
化学・材料・非鉄		6	15	5	10	5	3	2
情報・通信		4	4	7	8	10	12	16
自動車・輸送機器		14	10	12	3	13	10	3
電力・ガス		7	7	8	16	18	13	15
鉄鋼		5	7	8	8	4	3	3
重工業		17	8	8	4	7	11	5
機械		14	4	19	10	11	6	8
運輸業		1	1	5	5	2	2	2
その他製造業		8	0	6	2	6	3	4
サービス業		3	8	15	19	10	9	15
商社		1	1	2	0	1	4	1
金融・保険業		7	4	4	2	4	3	6
大学・官公庁・財団		2	5	6	2	0	5	2
進学		8	11	10	16	17	9	11
その他（進路未定含む）		7	6	8	14	12	17	6
合計		132	118	149	132	134	131	123

過去3年間の修士課程修了者の就職先



エネルギー科学研究科における国際交流活動

国際交流活動としては、エネルギー科学研究科紹介冊子を英文で発行するほか、先端科学としての国際研究協力はもとより、研究科独自の研究者・学生交流、留学生の受け入れなどを積極的に行っています。

1. エネルギー科学研究科国際交流委員会の活動

平成 11（1999）年度に、エネルギー科学研究科国際交流委員会を設置し、全学および関連学部・研究科と連携しつつ、部局間学術交流協定締結等の海外学術機関との対応、研究者交流、留学生に関する諸事業など、研究科の国際交流に関わる事項についての審議、実行を行っています。

2. 学術交流協定

エネルギー科学研究科では、特別コースを設置するなど、独自の国際協力活動を行うとともに、専攻間および部局間協定を積極的に締結し、海外の大学、研究機関との学術交流ならびに学生交流を推進しています。

3. 学生の交流

（1）留学生等

エネルギー科学研究科では、発足以来表 1 に示したように、各専攻とも積極的に世界各国から留学生を受け入れ、教育・研究指導を行っています。また、エネルギー科学研究科の学生が在学中に、海外の大学に短期留学することも積極的に推進しています。

（2）国際エネルギー科学コース

エネルギー科学研究科では、海外から特に優秀な学生を受け入れ英語のみで学位を取得できるコースを修士課程、博士課程ともに提供しています。

授業や研究において普通コースの学生とも交流することができ、研究科の国際化を推進しています。本コースの詳細は 44 ページを参照してください。

（3）ダブルディグリープログラム

エネルギー科学研究科では協定を締結したいいくつかの大学と京都大学の間で修士課程のダブルディグリープログラム（一定期間こちらの学生を派遣、または先方の学生を受け入れ、両方の大学で学位を取得できる制度）を行っています。現在、【修士課程】マラヤ大学（マレーシア）、チュラロンコン大学（タイ王国）、キングモンクット工科大学トンブリ校（タイ王国）、【博士課程】ボルドー大学（フランス）、浙江大学（中国）との間でこのプログラムを実施しています。

表 1 エネルギー科学研究科留学生数推移

（各年度 5 月 1 日現在の在籍数）

	平成27年度 (2015) 年度	平成28年度 (2016) 年度	平成29年度 (2017) 年度	平成30年度 (2018) 年度	平成31年度 (2019) 年度	令和2年度 (2020) 年度	令和3年度 (2021) 年度	令和4年度 (2022) 年度	令和5年度 (2023) 年度	令和6年度 (2024) 年度
修 士 課 程	20 (2)	26 (5)	29 (5)	39 (2)	47 (5)	44 (7)	58 (5)	52 (3)	35 (3)	37 (5)
博士後期課程	28 (16)	35 (15)	34 (15)	33 (7)	44 (9)	44 (12)	50 (16)	55 (12)	60 (11)	66 (10)
聴講生・特別聴講学生				1					1	1
研究生・特別研究生	6 (2)	6 (2)	3 (1)	6 (3)	6 (5)	4 (2)	1 (0)	4 (2)	6 (1)	4 (1)
合 計	54 (20)	67 (22)	66 (21)	79 (12)	97 (19)	92 (21)	109 (21)	111 (17)	102 (15)	108 (16)

（ ）内は国費留学生の数で内数

4 研究者の交流

(1) 外国人教員

当研究科には、外国人客員分野が設置され、エネルギー科学の各分野で活躍している教育・研究者を客員教授として迎えています。外国人客員教授の採用により、研究科教員との共同研究とともに、英語による講義を通じて、学生の国際感覚養成に大きな役割を果たしています。

この他、外国人教員として、平成9（1997）年度以降、教授1名、特定教授1名、准教授3名、特定准教授1名、講師1名、助教3名、特定助教6名を採用しています。

(2) 研究者交流

外国人研究者の受け入れは各専攻、講座で活発に行われています。各年度の交流実績を表2に示します。また国別では、フランス、スウェーデン、シンガポール、カナダ、中国、エジプト、マレーシア、オーストラリア、タイ王国など世界各国の研究者を受け入れています。

(3) その他

外国の研究機関、大使館等からの依頼による外国人の来訪（表敬訪問、視察等）が多数あります。

表2 エネルギー科学研究科研究者交流数推移表

(単位：人)

		平成27年度 (2015年度)	平成28年度 (2016年度)	平成29年度 (2017年度)	平成30年度 (2018年度)	平成31年度 (2019年度)	令和2年度 (2020年度)	令和3年度 (2021年度)	令和4年度 (2022年度)	令和5年度 (2023年度)	令和6年度 (2024年度)
外国人 教員	客員教授・准教授	1	3	1	1	2	0	0	1	1	1
	特定教授・特定准教授・特定助教	2	2	1	2	1	1	1	2	2	3
	教授・准教授・講師・助教	3	2	2	2	2	3	3	3	4	4
小 計		6	7	4	5	5	4	4	6	7	8
招へい外国人学者		1	2	2	2	3	3	1	3	0	0
外国人共同研究者		7	5	6	4	3	3	2	4	5	12
教員の外国出張、 研修渡航件数		66	73	54	76	66	0	0	25	49	61
招へい外国人学者及び共同研究者：京都大学に2週間以上滞在する者で、当該年度に受け入れた人数。 上記以外にも外国人研修員（他大学が招へいた研究者等）を毎年数名受け入れている。 教員の外国出張、研修渡航件数：寄附講座教員及びリサーチアソシエイトを含み学生・職員を除く。 基幹講座分のみを記載。											

エネルギー科学研究科を紹介する冊子を、和文とともに英文で発刊し、諸外国に配布するとともに、留学生などの進路、講義の選択に大いに活用されています。

また、エネルギー科学研究科の <https://www.energy.kyoto-u.ac.jp> には最新情報を英語版で掲載しています。

国際エネルギー科学コース

International Energy Science Course

京都大学は、平成21年度から平成25年度にかけて文部科学省が支援した「国際化拠点整備事業（大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業）、通称：グローバル30」の拠点大学の一つです。その事業の一環として、エネルギー科学研究科に国際エネルギー科学コース（International Energy Science Course, IESC）が開設され、文部科学省による支援終了後においても継続しており、広い視野からエネルギー・環境問題に取り組み国際的に通用する人材の育成に取り組んでいます。

国際エネルギー科学コースには、エネルギー科学研究科の全専攻が参画しています。そのうちエネルギー社会・環境科学専攻、エネルギー基礎科学専攻、エネルギー変換科学専攻が平成22年10月入学より修士課程、平成24年4月からは博士後期課程への入学者の募集を行っています。なお、エネルギー応用科学専攻でも、平成29年4月から博士後期課程への入学者の募集を開始しました。博士後期課程については、カリキュラムなどに既存の博士後期課程からの大きな変更はありませんが、履修科目数がより多い修士課程においては、英語を主な教育言語として卒業できる学位コースのための新たな仕組みを設けました。例えば、講義科目を英語でも提供しています。

国際エネルギー科学コースの入学選抜は、書類選考および面接（遠隔）によって行っています。海外からの応募の便宜をはかるため、平成27年度よりオンラインによる出願システムを開始しました。詳細については <https://www.energy.kyoto-u.ac.jp/en/> をご覧ください。本コースは、留学生の受け入れを容易にすることだけではなく、日本人学生の国際性を養うことも目的としています。従って、できるだけ留学生と日本人学生がともに学べるように、入学後は特に分け隔てすることなく学べる環境を整えています。

エネルギー科学は近年多くの国で注目されている新しい学際的な学問領域です。本研究科は世界に先駆けて学域の確立を目指して設立され、国際的に人材を養成する使命を担っています。設立の理念と使命において、本コースは一層国際化した研究・学習の場を提供します。



外国教員による授業風景、研修旅行、卒業式の様子

国際エネルギー科学コース（修士課程）

入試方法：国内外で大学を卒業した学生を対象として、提出書類による書類選考および面接による選考をおこないます。英語を母語としない学生には、TOEFL iBT / IELTS の公式テストスコアの提出が求められます。（当該年度の募集要項を必ず参照してください。）

入学時期：10月

出願締切：12月

履修科目：英語のみで修了に必要な45単位を修得することが可能。

外国人教員による授業科目が本コース向けに開講。

修得学位：修士（エネルギー科学）

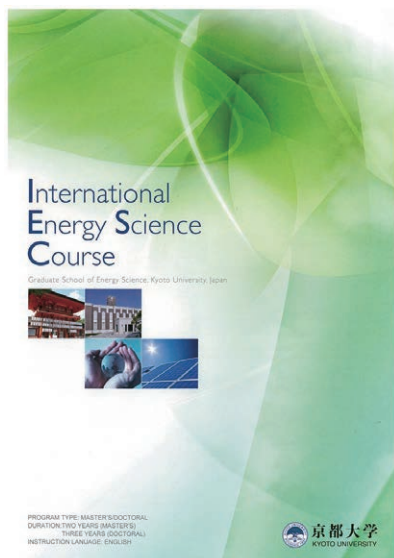
国際エネルギー科学コース（博士後期課程）

入試方法：修士学位を有する学生を対象として、提出書類による書類選考および面接による選考をおこないます。英語を母語としない学生には、TOEFL iBT / IELTS の公式テストスコアの提出が求められます。（当該年度の募集要項を必ず参照してください。）

入学時期：4月または10月

出願締切：6月または12月

取得学位：博士（エネルギー科学）



International Energy Science Course

The mission of the Graduate School of Energy Science (GSES) is to equip students with the expertise to take the initiative in solving energy problems in innovative ways that contribute to global sustainable development.

One of the most pressing issues in current energy problems is the need to cut down fossil fuel usage to develop sustainable energy systems. In order to help the achievement of a low carbon society, the GSES provides postgraduate students and researchers with advanced learning and research opportunities on the development and practical utilization of new energy technology. This is backed-up with social, economic and environmental assessment of energy systems within the context of a sustainable future. The International Energy Science Course (IESC) Master's Program teaches students about energy systems from a broad cross-disciplinary perspective, along with in-depth understanding of their own major. The IESC doctoral program provides international students and researchers who have a Master's degree an opportunity to further their studies.

Energy and environmental problems are of utmost importance for our future society. Experts in energy who have both broad perspectives and strong expertise are the key to the solution. We are eager to see that those who study in the IESC contribute to building a sustainable society. Should students wish to proceed on to a PhD, those who have been awarded the IESC Master's degree will have the typical admission fees waived.

DEGREE PROGRAMS

Master's Program

This two-year full-time program is a combination of coursework and research. Students must complete coursework, research and a thesis equating to 45 credits. The Master's thesis should be defended orally.

	Semester 1 (Fall Month)	Semester 2 (Spring Month)	Semester 3 (Fall Month)	Semester 4 (Spring Month)
Course	14 credits: 2 courses	14 credits: 2 courses	14 credits: 2 courses	14 credits: 2 courses
Research	16 credits	16 credits	16 credits	16 credits
Thesis			16 credits	16 credits

16 credits long weekly lecture is usually 2 credits.

Doctoral Program

In the doctoral program, the degree of Doctor of Energy Science is awarded to those who have conducted original academic research while meeting schedule stipulations by faculty members and successfully defending their doctoral thesis in a oral examination, with a minimum 4 credits earned from lectures/seminars.

AREAS OF STUDY AND RESEARCH

Majors available within the IESC will fall broadly within one of four departments: Basic Environmental Energy Science (BES), Fundamental Energy Science (FES), Energy Conversion Science (ECS) and Energy Science and Technology (EST). Students will have an academic supervisor in a field of their interest as shown in the following table. (more detail available in the handbook and online)

Topic area	BES	FES	ECS	EST
Energy conversion science			Power engineering Power engineering Construction engineering	Power engineering Power engineering Power engineering
Nuclear fusion	Energy policy	Reactor physics Nuclear design	Nuclear materials	Reactor materials Nuclear safety technology
Plasma and nuclear fusion		Plasma physics Plasma control	Plasma physics Plasma control Microplasma technology	Lower energy Reactor materials
Renewable energy analysis	Engineering for social systems (Economics, Technology, Social, Policy, etc.) System analysis			
Energy environmental impact	Development, environment Resource management Environmental impact assessment			
Energy security and policy	Energy policy Energy security Climate governance			
Energy and materials engineering	New functional materials Materials evaluation	Solar cells Batteries Hydrogen energy Carbon materials Solid state physics Semiconductor physics Nanotechnology	Materials science Materials and energy Functional and intelligent materials	Material forming processes Composite materials Nanomaterials Optical physics
Biological engineering and chemistry	Bioenergy Biomass and biochemical Process/technology	Bioenergy Biomass and biochemical Process/technology		
Thermodynamics and material processing			Thermodynamics Electromechanics Thermodynamics Thermodynamics	Thermodynamics Electromechanics Thermodynamics Thermodynamics

*EST will only be taking doctoral candidates at this time.

京都大学大学院 エネルギー科学研究科
Graduate School of Energy Science, Kyoto University

国際エネルギー科学コースパンフレット

京都大学大学院エネルギー科学研究科

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

tel:075-753-4871

fax:075-753-4745

e-mail:energysoumu@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

<https://www.energy.kyoto-u.ac.jp>

2025. 4発行



[illegible]